
ガスタの里に舞い降りた白き魔導師～我が儘な正義を断罪する者～

ガスタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガスタの里に舞い降りた白き魔導師〜我が儘な正義を断罪する者〜

【Nコード】

N6295V

【作者名】

ガスタ

【あらすじ】

さまざまな種族が独自の文化を織りなして成立している世界に“ガスタ”という一族が住まう里があった。ある日、その里に記憶喪失の少女が迷い込んだ。そして、一年半後、記憶喪失の少女は記憶を取り戻す旅に出る。記憶を取り戻した少女は我儘な正義を振りかざす組織に反逆する。

第1話 始まり

青々とした草原に包まれた大地。

そよ風が草原の草を揺らす中、二人の少女がその大地の上に佇んでいた。

「おめえも大変だな。せつかくの休日に呼び出されるなんて」

赤いゴスロリを着て槌のようなハンマーを持った少女が隣に居る白い服の少女に話しかける。

「にゃはは……まあ、今日は暇だったし」

「お前は能天気だな。まあ、いいや。目的のロストロギアは回収できたし、帰るか」

「そうだね、ちゃん」

二人の少女はその場から立ち去ろうとした。白い服の少女が持つ青い宝石がうっすらと光っているのにも気付かずに。

「あれ？封印魔法が少し弱まってる」

「別に大丈夫だろ。危険度は最低ランクのDだ。」

「……………そうだね」

しかし、その油断が命取りだった。白い服の少女に身に宿された膨大な魔力に反応して青い宝石の力が開放されてしまった。

「きゃあっ！！」

白い服の少女の背後に開かれた異次元の門　ワームホール。その超重力の引力に逆らうことも出来ずに白い服の少女の身体はワームホールに引きずり込まれていく。

「……………！！」

赤いゴスロリ調の服を着た少女が必死に手を伸ばすが、伸ばした手は空を切り、白い服の少女はワームホールに吸い込まれていった。

「ちょっと、ガルド！！何処に連れていくのよ！？」

場所は変わってとある森の中。民族衣装らしき服装の13歳程度の少女が少し大きな鳥に引き連れられ、森のどこかに連行？されていた。

“ガルド”と呼ばれた大きな鳥に案内され、少女が連れてこられたのは森の中の少し開けた場所だった。

そして、少女が見つけたのは……真ん中で横たわる同じ年ぐらいの亜栗色の髪の少女。

「っ！！ガルド、里に戻ってカームさんかウィンドール様を連れて来て！！」

……。

……。

.....

.....

「う.....」

「起きた？」

「此処は.....何処？」

「此処は“ガスタの里”の私の家。あつ、私の名前はウィンダ。ガスタの巫女、ウィンダだよ」

「私は.....」

亜栗色の少女は自分の名前を名乗ろうとしたが、口ごもった。その幼い顔には明らかな戸惑いの表情が浮かんでいた。

「私は.....誰なのでしょう？」

「えっと.....まさか自分の名前がわからないの？」

ウィンダの言葉に少女はコクリと頷いた。

「ウィンダ」

その時、木製の扉を開けてフードを被った妙齢の渋い男性がウィンダの家に入って来た。

「ウィンダール様？どうして、此処に？」

「君が拾った少女が目覚めと聞いたからね。駆け付けたんだ。」

「でも、この娘記憶を無くてるみたいで……………」

「記憶喪失か……………。次元世界を移動してきた時に記憶を失ったのだろう。」

「どうでしょう？」

ウィンダはこの“ガスタの里”の長であるウィンダールに指示を仰いだ。

ウィンドールは少し考えるようなじぐさをした後、ウィンダに告げた。

「ウィンダ、この娘は君の方で面倒を見てくれないか？」

「別にいいですけど……」

「それと気が向いたら魔法も教えてあげなさい。この娘の生活必需品は後でカームに届けさせるから」

ウィンドールはそう言い残すとウィンダの家から出て行った。

ウィンドールとウィンダの会話を聞いていた少女は完全に取り残され、目を白黒させていた。

「えっと……お世話になります？」

「そうだね。じゃあ、君の名前を決めないとね。いつまでも君って呼ぶのも嫌だろうし」

「はい」

「じゃあ、アイリーン。アイリーン＝ファーウォニウスが今日から

君の名前だよ
」

ガスタの里に突然現れた記憶喪失の少女はアイリーン。ファウオニウスになった。

そして、アイリーン。ファウオニウスがガスタの里に漂着してから一年と半年後に物語は加速する。

第1話 始まり（後書き）

初めてのなのはと遊戯王のコラボレーションモノです。

更新は一週間に2回ですが、都合によっては一回になります。私は受験生なので。

あと、感想も大歓迎です。批判は止めてください。

第2話 旅立ち

ある世界に“ミストバレー湿地帯”という場所がある。

現在は溶けることのない氷に覆われた世界 通称、歩みを止めた世界 の“氷結界”と“霞の谷”の間に位置しながらも「歩みを止めた世界」に巻き込まれなかった場所である。

その肥沃な大地に恵まれたこの地を古来より信仰してきた一族、それが“ガスタ”である。

そして、この“ガスタの里”に記憶喪失の少女が流れ着いてから一年と半年の時間が経過した。

“ガスタの里”に設けられた魔法の練習スペース。その練習スペースで二人の少女が鎧を削っていた。

二人とも同じ衣装を着て、同じ杖を振り回している。名前はアイリンとウィングダである。

「駆け廻れ 風の円舞曲!!」

「駆け廻れ 風の交響曲!!」

ゴウツ!!と物凄い音を立てて二人の魔法がぶつかり合う。一年と半年の時を一緒に過ごす間に二人は親友兼家族になった。それゆえに、相手の次の行動などお見通しなのだ。

ガキンツ!!

アイリーンとウィンダの杖がぶつかり合う。

「この一年と半年でここまで強くなるなんてね」

「サボってるってウィンダも追い抜いちゃうよ?」

「まだまだ負けないよ!!」

二人は同時に後ろに下がる。そして、同時に同じ魔法を発動させる。二人の杖が微かに風を纏う。二人が使用した魔法は「風神招来」。自分の武器に風の力を纏わせる初級魔法だ。しかし、初級魔法を侮るなかれ。この魔法一つでいろんな応用が利く。

「ストームウィップ!!!」「烈風弾!!!」

アイリーンの風の鞭とウィンダの烈風の弾丸がちょうど真ん中でぶつかり合う。

二人が使った魔法は「風神招来」を応用した彼女たち独自の魔法だ。

「せいっ!!!」

「おっと」

見えない不可視の攻撃がウィンダに襲いかかるが、ウィンダは攻撃が見えてるかのように回避行動を行う。

風と共に生きてきたガスタの一族には不可視の攻撃など効かない。攻撃の際に発生する空気の振動を読み取り、その振動から射程範囲などを予測して回避しているのだ。そもそも不可視の攻撃は風系統なので“風の加護”があるガスタの一族には効かない。そして、その“風の加護”はアイリーンも持っている。

「風連打」

ウィンダの杖から風の弾丸が連続で放たれる。その数は到底数え切れるものではない。

「くっ!!」

アイリーンは「ストームウィップ」で風弾を相殺するが、「ストームウィップ」は振るえば振るうほど威力が下がってくる魔法だ。だいたい10発の風弾を相殺した所で「風神招来」の効果が切れた。しかし、ウィンダの風弾はまだ残っている。

「ほらほら。さっさと避けないと当たるよ?」

「言われなくてもわかってるよ!!」

ニコニコと笑うウィンダにかみつくアイリーン。それでもウィンダの風弾を的確に避ける。

しかし、巧みなウィンダの風弾の使い方に翻弄され、風弾の一発がアイリーンに当たってしまった。

すると、アイリーンの腕に付けられた腕輪が赤いランプとブザー音を鳴らした。

「あゝあ。これで10勝15敗か」

「あはは また私の勝ちだね」

「接近戦に持ち込めたら勝てるのに……」

「そう簡単に接近させないよ」

二人は自分の杖を背中に背負う。

この練習スペースを使って模擬戦を行う時は風系統の魔法以外は使ってはいけないというルールがある。

しかし、ガスタの一族は風系統の魔法が効かない。

では、どうやって模擬戦の決着をつけるのか？それはガスタ一族の天才である“ガスタの静寂 カーム”が作った腕輪の出番である。

この腕輪はどちらかが敗北条件（敗北条件はお互いの合意の下で決める）を満たすと光るようになってる。

ちなみに、アイリーンとウィンダの模擬戦の敗北条件は身体はどこかに魔法をヒットさせること。

閑話休題

「それにしても……明日はとうとう出発の日か……」

「寂しいなら、無理してついてこなくてもいいよ？」

「冗談！！もしかしたら、姉さんが見つかるかもしれないし」

明日、アイリーンはウィンダはガスタの里から旅立つ。目的はアイリーンは失った自分の記憶を取り戻すため。ウィンダは数年前に行方がわからなくなった自身の姉、リーズを探し出すため。

「じゃあ、明日に備えて今日は夕食食べたら、寝ようか？」

「えっ？いくらなんでも早過ぎない？」

頭の上に疑問符を浮かべるアイリーンにため息を吐きながら、ウィンダは空を指差した。

空を見上げてみると煌めく星が無数に浮かんでいた。それに綺麗な満月も出ている。

「……………あれ？」

「私たちが練習スペースに入った時は夕暮れだったんだよ？まあ、練習スペースはいつでもお昼のように明るいけど」

二人がつさきまで模擬戦をしていた練習スペースはこれまたカームが創造した装置によってお昼のように明るくなっている。そのため、外の時間の感覚がずれる者が多く居る。

「一日中訓練できるっていうのも困りものだね」

「まったくだよ」

そんな会話をしながら二人はウィンダの家に戻って行った。

.....。

.....。

.....。

.....。

太陽が再び昇り、里を明るく照らす。早朝の黄昏時にアイリーンとウィンダは里の入り口の前に居た。

二人とも簡単な手荷物を持って里から巣立とうとしていた。

「くれぐれも気をつけてな」

「ありがとうございます、ウィンダール様。色々とお世話になりました」

「気にする必要はない。君の記憶の手掛かりが見つかることを祈ってるよ」

「ありがとうございます」

アイリーンは見送りに来てくれたウィンダールにもう一度お礼を言った。

「アイリーン、準備できたよ」

ちょうど出発の準備を終えたウィンダが合流した。その横には巨大な鳥 ガスタ・ガルドが居た。

このガスタの里には四種類の鳥獣が生息している。その内の二種類の鳥獣はガスタの民と共存するために自らの力を封印して身体を小さくしているのだ。

「わかった。」

ウィンダとアイリーンは本来の大きさに戻ったガルドの背中に乗った。

ガルド専用の鎧にはウィンダとアイリーンの荷物が備え付けられている。

「じゃあ、ウィンダール様。行ってきます!!」

ガルドは翼を大きく広げるとその巨体を浮かび上がらせて朝日が昇った空に向かって飛び立った。

「本当に行かせてよかったの?」

ウィンダとアイリーンが無事に旅だった後、ウィンダールに声を掛ける人物が居た。

ガスター族随一の天才と謳われる女性。ウィンダをそのまま成長させたような容姿を持つ女性の名前は“ガスターの静寂 カーム”。

この女性はウィンダールと対照的にアイリーンが旅立つことに反対

していた人物だ。

「ああ。」

「わかってるの？あの娘この記憶が戻ったら“管理局”にこの里の場所が伝わるかもしれないのよ？私は……あの娘に裏切り者になって欲しくないの」

最後の方は擦れるような声だったが、ウィンドールの耳にはきちんと届いていた。

カームは何かとアイリーンを気にかけていた。難易度の高い魔法の習得に四苦八苦していたアイリーンに的確なアドバイスを与えたりしていた。

「アイリーンが私たちを裏切ることはないさ。一度彼女の心の中を覗いてみたんだ」

「他人の心を見るのは禁術よ？」

「ははは。まあ、今回は許してくれ。それで彼女の心の中を見たら、純白の正義の中に黒の疑惑があったよ」

「それって……」

「ああ。彼女は間違いなく管理局に疑問を持っている。そんな子が真っ直ぐ管理局に味方するとは思えない」

「でも……………」

「ウィンダがついているだ。きっと大丈夫さ」

ウィンダールは微笑みながらカームを安心させるように言うが、カームの不安は拭えなかった。

カームにとってアイリーンは自分の妹のような者だ。それを失うのがカームには耐えれなかった。

ウィンダールが屋敷に戻る中、カームはしばらくの間ウィンダとアイリーンが飛んで行った空を見つめていた。

第2話 旅立ち（後書き）

カームはガスタの天才と呼ばれるほどの頭脳を持っている。まあ、ISの篠ノ之 束をまともにした感じだと思ってください。ちなみに、お姉さんの存在。

第3話 霊使いの里

第3話 「霊使いの里」

自分の記憶の手掛かりを探すために里より旅立ったアイリーン・フアーウオニウス、2年前に行方知れずになった自分の姉になったウインダ・フアーウオニウス。
家族兼親友である二人はウインダのペットであるガルドの背中に乗って悠々と空を漂っていた。

「まずは次元世界を移動する秘術を持つてる人を探さないと……」

「そう言えば、ウインダ様とカームさんが私のことを異なる次元世界の人って言うってたけど“次元世界”って何？」

「えっと、次元世界って言うのは……」

この世には、無限に近い数の世界と宇宙が存在する。その世界はそれぞれ次元の壁と仕切りによって交わることなく、独自の慣習や技術が発達している。次元の海で隔てられた世界のことを次元世界という。

この次元世界には人間が生息する世界もあれば、モンスターなどが生息する無人世界も存在する。二人が居る世界はモンスターと人間が共に共存している珍しい世界なのだ。

「　　ということ。この次元世界を統括する組織が“時空管理局”」。アイリーンも管理局には気を付けた方がいいよ？」

「どっして？」

「アイツら、自分のやることが絶対正義だと信じてるんだ。しかも、私を使う魔法が異端で自分たちの使う魔法こそが本物の魔法とか言う奴なんだ」

「ふん・・・・・・・・」

（何だろう？少し・・・・・・・・心が痛い。私って、管理局と関係があったのかな？）

アイリーンの頭の中でそんな悲しい予想が過ぎるが、アイリーンは首を左右に振ってその予想を振り払った。

「まあ何にせよ、次元の壁を超える秘術を会得した人に会わないといけないんだけど・・・・・・・・」

「でも、ウィンドール様もその秘術を使える人に心当たりはないんだよね？」

「うん。まあ、この世界に住む種族は多くないから片っ端から回っていけば見つかるよ」

「そうだね」

そんな会話をしているとウィンダが操縦していたガルドが急に停止した。

どうやら何かを見つけたようだ。その証拠に真下の森がザワザワととてもざわめいている。

森の中から漂ってくる闇の波動を二人は察知した。

「ねえ、アイリーン」

「うん。“インヴェルズ”だ」

さっきまで楽しそうだった二人の表情は一気に険しい表情に変わった。

アイリーンが呟いた“インヴェルズ”というのは、この地に住む種族の一つである。

かつて世界の支配権をめぐるヴァイロンという種族の闘いに敗れ、深淵なる地に封印された種族であり、ワーム侵略に始まる地上世界の混乱によってその封印が解かれて以来、ガスタの領地であるミストバレ 湿地帯に度々侵略しに来たが、すべて撃退されている。

閑話休題

「でも、インヴェルズがどうしてここに……」

「何かを追ってるみたい。どうする？」

「気になるから追いかけるよ」

ウィンダはガルドを反転させてインヴェルズたちが追う存在を探し始めた。

「はぁ……はぁ……」

ウィンダたちが旋回している森の中を一人の少年が駆けまわっていた。

髪と瞳は黒真珠のような漆黒。その身に纏う民族衣装はガスタの一族のモノと似通った点がある。

その少年を追っているのは、蜂の大群。いや、ただの蜂ではない。身体は蜂よりも数倍大きく、身体は真っ黒だ。

インヴェルズの先鋭

それが少年を追いかけてまわしている敵の名前だ。

「うわっ！！」

後ろを見ながら逃げていると足元に伸びていた木の根っこに引っかかり転んでしまう。

「くう……」

インヴェルズの魔の手が少年に伸びようとした時……

サンダースパーク！

突然、雷鳴が轟き、雷がインヴェルズの先鋭をなぎ払う。

その刹那、タンっという足音を立てて、アイリーンとウィンダが降り立った。

ギギギ……ガスタの旋風とガスタの巫女が何故此処に居る

「旅の最中なの。まったく幸先悪い！！」

アイリーンは「ストームウィップ」でインヴェルズの先鋭を切り裂く。インヴェルズの先鋭はこんな場所に幾度となく苦渋を舐めさせられた相手がいることに驚いていた。

インヴェルズの先鋭はこの二人を相手にするのは不利だと判断して、逃げ出した。

「いつの間にか“ガスタの旋風”が有名になってるね」

「言わないでよ。結構恥ずかしいんだよ？」

“ガスタの旋風”というのはアイリーンの二つ名だ。ガスタの一族の魔法使いはみんな自分の二つ名を持っている。インヴェルズの侵攻を防ぐために何度も戦場に出ている内にアイリーンにこの称号が付いたのだ。

「あの………助けてくれてありがとうございます。僕はダルク。闇霊使いのダルクです」

「私はガスタの巫女 ウィンダ。こっちはペットのガルド」

「私はガスタの旋風 アイリーン。」

「ねえ、霊使いの一族なら、里に案内してもらえないかな？ 私たち、ある魔法を探して旅をしているの」

“霊使い”というのは使役魔法（魔物や人を使役する魔法）を代々受け継いでいる少数民族だ。

ガスタのように里で暮らしているが、その里はガスタの里以上に強力な結界に覆われているため、外から認識することはできず、同じ霊使いの者しかその里に入ることはいできない。

「わかりました。助けてもらったお礼にお二人を霊使いの里に案内

ウィンドダがそう命令するとガルドは一鳴きして身体を通常モードに変えた。

「あつ！！ダルク！！」

三人の前に現れたのは、ダルクと同じ霊使いの民族衣装を着た少し薄めの青い髪の少女だった。

彼女もダルクと同じ霊使いなのだろう。その証拠に背中に杖を背負っている。

「ダルク！！勝手に結界の外に出たらダメでしょ！！明日はヒーターの誕生日なんだよ！？」

「わかってるよ。少し……大切なモノを取りに行ってるんだよ」

「ダルク！！何処に行ってたんだよ！？」

「ヒーター……」

里のある一軒から赤い髪の強気なそうな女の子、ヒーターが出てきた。その表情は明らかに怒っていた。

しかし、その目じりには涙が浮かんでいた。

すると、ダルクはポケットから炎が燃え盛っている草を取り出した。ダルクが取り出したその植物を見た青髪の少女、ヒーター、ウィンダ、アイリーンの四人は驚いたような表情を浮かべた。

「それって…… “フレイムフラワー” ？」

「ああ。インヴェルズの奴の目を盗んで採って来た」

ダルクが採って来た植物は“フレイムフラワー” と呼ばれる一部の地域にしか咲かない花だ。

つぼみを膨らませるまで他の花と変わらないが、つぼみが開くと燃え盛る炎の花を咲かせるという不思議な花である。今はインヴェルズの支配地域にしか生えないので入手はほとんど不可能だ。

「……………バカ。いくらなんでも無茶し過ぎだ」

「ごめん。バカだから、誕生日プレゼントこんなモノしか思いつかなかったんだ」

「でも……………ありがとう」

二人の頬はほんのりと赤い。

「ウインダ、私たち蚊帳の外だね」

「同感」

「ヒーターとダルクは一度あの状態になるとしばらくそのままだから、私が長の所まで案内するよ」

ダルクの代わりに案内を申し出たのは、里に入って真っ先にダルクを見つけた青髪の少女だった。

「お願いするよ。えっと君の名前は？」

「水霊使いのエリア」

こうしてウインダとアイリーンはエリアの案内で霊使いの長の下に向かった。

「ダルクを助けてくれたこと、感謝する。」

霊使いの里の中で一番大きい屋敷に案内されたウィンダとアイリン。
その中ではダルクやヒーター、エリアの親たちが集まっていた。里の長はダルクの父親だ。

「そう言えば、自己紹介がまだだったな。私はダリアン。君たちが助けたダルクの父親だ。」

「ガスタの巫女 ウィンダです」「ガスタの旋風 アイリンです」

「ほう………。ガスター族がこのような土地に何の用だね？」

ウィンダとアイリンが自己紹介するとダリアンはそう質問を返した。

「ある魔法を探しています」

「ある魔法？」

「次元転移魔法」

「あの秘術か………。残念ながら、この里にはその秘術の情報はない」

「「そうですか……。」」

二人は揃って落胆したような表情を浮かべた。それを見たダリアンは陽気に笑った。

「まあ、秘術はないが、代わりにこの里の書庫に連れて行ってあげよう。それとも、不満かな？」

「「「お願いします!!」」」

……。

.....。

.....。

.....。

「ここがこの里の書庫だ。禁書は見せれないが、それ以外なら勝手に見ていい」

「ありがとうございます！」「」

「ははは 夕食の時間になったら呼びに来る。それまでゆっくりしてたらいいな」

そう言い残してダリアンは霊使いの里の書庫から出て行った。

「さてと.....作業を開始しようか？」

「そつだね」

ウィンダとアイリーンは互いに頷き合つと閲覧を許された本棚を物

色し始めた。

第3話 霊使いの里（後書き）

大人形態の霊使いの名前は勝手に変えました。だって、子供形態と名前が同じなんだもん。

第4話 手がかり

第4話 「手掛かり」

簡単なあらすじ

さまざまな種族がひしめき合い、領土を奪い、取り返しの連鎖が続く世界。

その世界で数少ない人が集まって作り上げた里に一つ、霊使いの里。その里長の息子ダルクをたまたま助けたウインダとアイリーンは客人として里に招かれた。次元を移動する秘術は得ることができなかつたが、里長の計らいで里の書庫に立ち入りを許された。

カリカリカリ

ウイン ウイン ウイン

貴重な本を湿気から守るために窓が取り付けられていない薄暗い書庫。ろうそくの炎だけがゆらゆらと周囲を照らす中、何かを書く音と機械の駆動音だけが響いていた。

「スキャン完了。データ化して取り込み。」

薄暗い空間で作業しているのは、当然の如くウィンダとアイリーンの二人。

アイリーンは何やら不思議な機械を動かして魔法関連の書物をスキヤンしてさらにデータ化して保存する。ウィンダは羊皮紙にひたすら本の中身をトレース（模写）している。

「さすがに霊使いの里だけあって、いろんな属性の魔法書が保存されてるね」

「ガスタの里には初級の魔法しか載ってなかったからね。風の上級魔法とかは載ってるのに」

「ガスタは風の一族だからね」

会話しながらも二人は作業の手を休めることはない。それでも最初の30分で書庫の中から厳選してきた書物の半分も終わっていない。

「次の本をセットして………スキャン開始。」

コピーが終わった本を機械から取り外し、新しい本をセットする。すると、機械がセットされた本の中身をコピーしていく。コピー機の発展型のような性能を持つ機械のおかげで作業の時間が圧倒的に

短縮されていく。

「カームさんも凄いもの作るね」

「それはカームさんが作ったものじゃないよ？」

「えっ？ そうなの？」

「うん。確か・・・A・O・Jの研究所からパクってきたって聞いた」

「ちよっ！..！」

「まあ、そのおかげで作業が進むんだからいいじゃん」

「まあね」

二人の会話の中に出てきたA・O・Jというのは、ミストバレー湿地帯の周辺の種族が連合して“ワーム”に対抗するために設立された組織のことだ。非常に優れた技術力を有し、自立駆動型機械兵器なども製造していた。カームも一時期その組織に留学していたらしい。

閑話休題

アイリーンが2冊目の本をスキャンしている最中に机の上に置かれていた砂時計の砂がすべて落ちた。

「アイリーン、交代」

「うん」

砂時計の砂がすべて落ちたのを合図に二人は担当する作業を入れ替える。

ちなみに、砂時計は一時間周期。その砂時計を反転させて再び作業に没頭する。アイリーンの目の前に詰まれているのは、薬学に関する書物でウインダの目の前に積まれているのは、魔法に関する書物。その量はアイリーンのほうが圧倒的に少ない。

・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

.....

砂時計の砂が三回ほど落ち切った頃。

「つ、疲れた.....」

「同じく.....」

「.....」

ウインダとアイリーンは机の上に突っ伏していた。休みなしに作業していたのだから、ある意味当然であろう。そして、二人は疲労のせいか背後に立っている人物にまったく気付かない。

「かなり多いからね。あゝ肩凝った」

肩の凝りをほぐす為に両肩をぐるぐる回すウインダ。

「でも、この書庫にある重要な書物は写せたし.....」

「後は旅の最中で魔法を習得すれば問題なし!!」

「ちよっ、やめっ、いたっ!!っ、突かないでっ!!」

二人は聞き覚えのない声に反応して後ろに振り向いた。

二人の背後には茶色の髪にこれまたエリアと同じ民族衣装を着た15歳程度の少女がガルドに追いかけて回され、頭をしきりに突かれていた。

「誰!?!」

「今まで気づかなかったの!?!」

少女は涙目になっていた。

とりあえず口笛を吹いてガルドを止めるウインダ。ガルドはウインダに「不審人物が入ってきたら、容赦なく襲いかかってよし。」と命令されていたのでそれを実行したのだろう。

「それで君は誰?」

「僕はアウス。地霊使いのアウス。夕食ができたから呼びに来たんだ」

「そっか。よく考えたらもう3時間は過ぎてるもんね。ウィンダ、ダリアンさんの厚意に甘えちゃおうか？」

「そっだね」

さて、ダルクを助けた恩返しに夕食を御馳走になることになったウィンダとアイリーンだが、ダリアンの屋敷で開かれた夕食はそんなレベルではなかった。テーブルの上に並べられた豪華そうな料理。そして、里の全員がこの屋敷に集まっている。

「さて、一日早いけど、ヒータの誕生日を祝ってパーティの開催だ！」

ダリアンがそう宣言して賑やかな宴会が始まった。

「異民族である私がこの場所に居ていいのかな？」

「気にすんなよ、アイリーン。せっかくの宴会なんだから楽しまないと損だよ？」

そう言いながらウィンダは骨付き肉に豪快に被り付く。

(まあ、ウィンダの言うとおりか。)

心の中でそう思ったアイリーンも出された豪華な食事に手をつける。食事を食べながらアイリーンは周囲を見渡した。会場には四つのテーブルが用意され、二人が座っているのは一番小さいテーブルだ。残りの三つの大きなテーブルには、子供のグループ、母親のグループ、父親のグループに分かれてそれぞれ座っている。わいわいとみんなが楽しそうに騒いでいる中、アイリーンは子供のテーブルに疑問を覚えた。

(火霊使い、水霊使い、地霊使い、闇霊使い、光霊使い……
風霊使いが居ない)

「アイリーン、気付いた？」

アイリーンが違和感に気付いた刹那、ウィングダは神妙な顔つきでアイリーンに話しかけた。骨付き肉をかぶりながら。

「うん。風霊使いだけが居ない」

「霊使いは一つの系統につき、一人の使い手が居る。風霊使いだけが居ないっていうことはないはずだけど……………」

「二人とも楽しんでるか？」

周囲に聞こえないように小声で会話する二人にこの宴会に二人を招待した張本人のダリアンが声を掛けてきた。アルコール類を飲んだのかその顔は赤い。

「はい。でも、よかったですか？こんなお祝い事に異民族である私たちが参加して……………」

「長の私が許可したんだ。誰も反対できんさ」

（（職権乱用……………））

ウィンダとアイリーンは同じことを思った。

「そうだ。最近見つけた書物の中に気になる一文があったんだ」

ダリアンが取り出したのはいかにも古そうな本。それほど分厚くなく先祖が書いた日記のようにも見える。その本のあるページを開いて二人に見せた。

そのページには以下の分が記されていた。

「光をその身に纏いしモノたち 異次元よりこの地に現れん。そのモノたちの名はヴァイロン」

「この文章が本当なら、ヴァイロンの一族は次元を渡る術を知っているかもしれない」

「そうですね。貴重な手掛かりをありがとうございます」

パタンと本を閉じてウィンダはその本をダリアンに返した。

「気にすることない。これも我が息子を助けてくれたお礼だ」

そう言ってダリアンは本を再び自分の懐にしまった。

ウィンダとアイリーンは新しい手掛かりが見つかったことを喜びながら美味しい食事に舌鼓を打った。

宴会は主役のヒータが寝付くまで続けられた。

翌日の早朝。

「それではダリアンさん、色々とありがとうございました」

アイリーンは見送りのダリアンにペコリと頭を下げた。

「いや、こちらも外の情勢を聞いてよかったよ」

「機会があつたらまた」

ウィンドはそう言い残して元のサイズに戻ったガルドを駆って飛び立った。

次の目的地はヴァイロン一族の住処。しかし、その前に重大な問題が引っかかることを二人はまったく予期していなかった。

第4話 手がかり（後書き）

風霊使いは現在行方不明中です。風霊使いは放浪癖というスキルが備わっています。

第5話 リチュアの少女

第5話 「リチュアの少女」

簡単なあらすじ

霊使いの里長の息子である闇霊使いダルクを“インヴェルズの先鋭”から助け出したウインダとアイリーン。長の手配で書庫にも入れてもらい、さらには宴会にも参加させて貰った。そして、その宴会の最中に里長のダリアンから古の時代にインヴェルズを封印した“ヴァイロン”の一族なら、次元を移動する術を知っているかもしれないという情報を手に入れる。

「さて、アイリーン。困ったことが起こったわ」

「？」

「ヴァイロンはこの地上に居るわけじゃないの。いつも天界に居るの。そして、その天界に行く術を私たちは知らない」

「つまり、手掛かりを見つけても意味なしと」

アイリーンは落胆した。

自分の記憶の手掛かりに一步近づいたと思ったら、逆に二歩下がったような感じた。

しかし、ウィンダは落胆した様子もなかった。

「天界へ行く方法を知っている人に覚えはあるから大丈夫だよ。私の姉、リーズはヴァイロンの力を借りてインヴェルズと戦っていたから」

「でも、ウィンダの姉さんは……………」

「……………うん」

ウィンダの実姉 リーズ＝ファールウォニウスはガスタの里では知らない人は居ないと言われるほどの有名人だった。文武と魔法に優れ、

インヴェルズの侵略を第一線で防いでいた凄腕の人物。

疾風のように森の中を駆け回ることから、“ガスタの疾風”の称号を拝命し、ヴァイロンに選ばれた。

しかし、アイリーンが漂着する半年前　つまり、二年前に突如として消息を絶った。里の人間はリーズを探し出そうとしたが、インヴェルズの大群を退けるほどの戦力を持つ人物が居なかったため、断念していた。

「でも、希望がまったくないよりはいいでしょ？姉さんは絶対どこかで生きてるんだから」

「そうだね」

二人の間に笑みがこぼれた。

ひたすら南に南に進む二人。太陽がある程度高くなった時、ウィンダは急にガルドを滞空させた。

目の前にインヴェルズの幹部である“インヴェルズ・ホーン”が居たからだ。幸いにも、相手はこっちに気付いておらず、空中に佇んでいるだけだ。

「ガルド、ゆっくりと降りて。あいつに気づかれないように」

ウィンダの命令に素直に従い、二人を乗せたままガルドはゆっくりと森の中に降りて行った。

「まったく………何でこんな所に幹部クラスの奴が居るのよ
！！」

ウインダは毒づいた。

二人が飛んでいた空域はミストバレー湿地帯から随分離れた場所だ。
そんな地域に幹部クラスのインヴェルズが居ることなど滅多にない。

「ウインダ、暇ならテントの準備手伝ってよ」

「今から木の実を探してくるよ。」

ガルドを連れてウインダは木の実探しに向かった。

幹部級のインヴェルズが居る限りこの場所から下手に動くことはできないので早々に野宿の準備に取り掛かることになった。

(それにしても、どうして幹部級のホーンがこんな辺境の地に？ミストバレー湿地帯が中々侵略できないから、新しい土地でも探しているのかな？)

ウインダはそんなことを考えながら食べれる木の実を採集する。ガルドも協力してくれたため、採集用の袋はあっという間に一杯になった。

(ん？なんか変な魔力の流れが……。これは結界かな？)

「インヴェルズの奴らがこの先に居るかもしれないから早く戻ろう」

「~~~~~」

ウインダが木の実の採集に精を出している頃、テントを組み上げ終わったアイリーンはすぐ隣の小川で鼻歌交じりに釣り糸を垂らしていた。

「こんなことになるなら、一週間ほど霊使いの里に居たほうがよかったのかも？」

アイリーンは霊使いの里の滞在期間を物凄く短くしたのを今更ながら後悔した。

しかし、そんなに滞在しなかったのにもちゃんと理由がある。ガスタの里も霊使いの里も狩猟と採集で食いつないでいる。なので、あまり迷惑を掛けないようにしようという気持ちからそんなに滞在期間を長く取らなかったのだ。

(それにしても……………ここら辺来てから胸騒ぎが収まらない。何でだろ?)

鼻歌を止めて少し考え事をするアイリーン。

ピクッ

しかし、その思考はつりざおを伝わってきた魚が食いつく感触によって打ち切られた。

アイリーンは意識をつりざおに集中させて、刹那の間につりざおを振り上げる。

「えい」

釣りあげた魚を地面に着けないように風で浮かばせるアイリーン。

「これで一匹。最低でもあと一匹は釣らないと」

アイリーンは手際よく釣り針を外して、再び小川に釣り糸を垂らす。バケツ等は持ってきていないため、釣った魚は風のお皿の上に乗っけられたままだ。

一匹の魚を釣り上げたことでテンションが上がったのか、アイリーンは先ほどの胸騒ぎのことなど忘れていた。

「……森が騒がしい。風のせいかな？」

そんな独り言を呟きながら、食材確保を続けるアイリーン。

「アイリーン、木の実採って来たよ」

「お疲れ様。休んでていいよ」

「そうさせてもらおう」

ウィンダは木の実の入った袋をテントの中に放り込むと代わりに霊使いの里で模写した魔法書を引っ張り出してきた。

「そう言えば、アイリーン。南の方に結界らしいモノを見つけたんだ」

「結界？また、インヴェルズ？」

「多分そうだと思うんだけど……」

「おっと、釣れた」

素早く釣竿をあげると先ほどと同じ魚が二匹一緒にあってつりあがった。

その二匹も先ほどの一匹と同じように風のお皿の上に乗せる。

「夕食はこれで十分かな？」

「そつだね」

本日の夕食分を確保したアイリーンはテントの中に釣竿を直すと近くにあった平らな石の上に座り込んだ。そして、ポケットから板のような形状の機械を取り出して起動させる。

空間投影型ディスプレイが展開されて、魔法書の写しが表示される。

「……………焰よ」

アイリーンは右手に意識を集中させて炎の魔法を発動させる。一瞬火の粉があがったが、すぐに消えてしまった。

「……………焰よ」

もう一度同じ魔法を使うが、結果は変わらない。

「………のよ、焰よ。」

ウィンダの指先にゆらゆらと揺らめく炎が出来上がる。

「うーん……………ちゃんとイメージできてるのになどっして？」

「適正の問題じゃないの？アイリーン、代わりに水の魔法は得意でしょ？」

アイリーンは「まあね」と言いながら魔法を使った。すると、周囲の水蒸気が凝縮されて水玉が出来上がった。

ウィンダやアイリーンが使う魔法には、個人の属性の相性というも

のがあり、相性によって得意の属性が変わってくる。ウインダは風と炎が得意でアイリーンは風と水が得意なのだ。ちなみに、相性が悪いと言ってもまったく使えないわけではない。

「先に得意属性の魔法を習得したほうがいいと思うよ？」

「そうするよ」

。。。

。。。。。。。

。。。。。。。。。

。。。。。。。。。。。

時間はあっという間に過ぎ去り、太陽はすっかり沈んでしまった。二人は薪を集めてウインダの炎魔法で火をつけると夕食の準備に取り掛かった。

「あむ。インヴェルズの奴らに気づかれないかな？」

「大丈夫。周囲に風の網を敷いてるから、近づいてきたらすぐにか
かる」

「相変わらず細かいことは得意だな」

「まあね。ほら、焼けたよ」

「ありがとう」

丸焼きにした魚をウインダに渡すアイリーン。自分ももう一匹の魚
を手にとってかじりついた。
あたりはもう真っ暗で薪の炎だけが周囲を明るく照らし出している。
その炎は血に飢えた猛獣なども退けてくれる。

「はむ。」「もぐ。」「

無言で丸焼きの魚にかじりつく二人。
食べ終わった後の残骸はウインダの魔法で焼却処分。

「ん?」「どうしたの?」「

「私の包囲網に何か引つかかった」

「敵？」

「わからない」

ウィンダとアイリーンは自分の杖を取り出して警戒する。

ガサガサという音を立てて茂みの中から現れたのはインヴェルズの者ではなく、黒を基調にした魔法使いのような衣装を着た少し年下の女の子だった。

「……………」

しかし、二人は警戒を緩めない

すると、二人の前に現れた少女はゆらつと身体を揺らすとそのまま前めりに倒れこんだ

「「へ？」」

「……………お腹、空いた」

ぐぎゅ〜と少女の腹の虫が鳴る。これには二人も毒気を抜かれた。

「助かった。もうすぐで飢え死にするところだったよ」

「夕食が余っててよかったね 自己紹介が遅れたけど、私はウィンダ」

「私はアイリーン」

「僕はエリアル。リチュア＝エリアル」

「……リチュア？」

「うん。」

この日、ウィンダとアイリーンの二人はリチュアの変わり者と噂されるリチュアの少女と出会った。

そして、この少女 リチュア＝エリアルとの邂逅がアイリーンの記

憶の手がかりへ大幅に近づくことになるとは誰も予想できなかった。

第5話 リチュアの少女（後書き）

ようやくエリアルを出せたよ
WWW
WWW
WWW

第6話 管理局

第6話 「管理局」

簡単なあらすじ

ヴァイロンの一族の住処である天界へのルートを知っているウインダの姉、リーズを探すために南下していたウインダとアイリーン。しかし、その最中幹部のインヴェルズ・ホーンと遭遇。無闇な交戦を避けるために森の中で野宿することを決めた二人。そして、二人の前にリチュア一族の魔法使い、リチュアIIエリアルが現れた。

「リチュアの魔法使いがどうしてこんなところに？リチュアの里は

「ここから離れてるはずだけど？」

ウインダがエリアルに尋ねる。

“リチュア”というのは平和を願い、古の最強の力を封印した『氷結界』と同じ力を持ちながら儀水鏡を用いた邪悪な儀式を行う一族のことでインヴェルズと同じくガスタが支配する？ミストバレー湿地帯を狙っている。

「話せば長くなるけど……実はこの先に“管理局”の研究所があるんだ」

「「!!」」

「僕はその研究所から逃げ出してきたんだ。リチュアでもガスタでもどの部族でもいいから救助を求めするために。でも、お腹が」

急にアイリーンはエアリアルという言葉を遮った。

その視線はエアリアルが通ってきた道の先に向けられていた。アイリーンの表情は険しく、いつでも魔法を使えるように杖を構えている。

「「G A A A A A A A A A!!」」

暗闇の中から現れたのは漆黒の毛並みを持つ二匹の少し大きな狼だ

った。

鋭利な爪と牙はウインダとアイリーン、エアリアルに向けられている。そして、真っ先に動いたのはアイリーンだった。

「獣ごときが……」

右側の狼のあごを蹴り上げる。

「嘗めるな!!」

左側の狼の腹部を杖で殴る。

「吹き飛ばせ ストームブリンガー!!」

さらに、風魔法を使って襲い掛かってきた二匹の狼を遙か遠くに飛ばす。

「……見たことない種だったね。」

「。じ。」

この世界にも当然狼は居る。しかし、ウィンダもアイリーンも漆黒の毛並みを持つ狼など見たことがない。突然変異種という可能性もあるが、この世界の狼は灰色の毛並みだ。

「エアリアル、何か知ってる？」

「管理局の追手だよ。散々追い掛け回された記憶があるし」

「………ねえ、エアリアル。貴女が捕まっていた施設にリーズっていう人は居なかった？」

「居たよ。その人がずっと私たちを守ってくれてた」

「「!!」」

「これでその施設に潜入しないといけない理由ができたね」

「うん。」

アイリーンの言葉にウィンダは薄っすらと笑みを浮かべながら頷いた。

ウィンダとリーズの関係を知らないエアリアルはかわいらしく小首を

「エリアル！！こいつもお前の追手！？」

「うん。しかも、人間を改造した奴」

「「えっ？」」

二人はエリアルの言った言葉に自分の耳を疑った。

エリアルは悲しそうな表情を浮かべながら、自分が抜け出してきた研究所で行われていたことを語った。

「僕が抜け出してきた研究所では、人間にモンスターの細胞を埋め込んで人間でありモンスターでもある新しい種族を作り出そうとしていたの。自分に従順でマシンのように命令に従う存在を。でも、ほとんどがモンスターの細胞に取り込まれてモンスター化した。中には人としての意思が残ってることもあるけど、そんなモンスターはあの首輪で人間としての感情を封じられてる！！」

エリアルはRDDの胴体と首の付け根部分に取り付けられた銀色の首輪っかを指さしながら叫んだ。

「………ウインダ、少し禁術を使うことにするよ」

「私も使うよ。」

ウインダとアイリーンの真ん中に居たエリアルは急にビクツと身体を震わせた。

二人の周囲には猛獣すら怯えさせて足を竦ませるくらいの冷たい冷たい雰囲気フレイムが漂っていた。

今の二人は非常に怒っていた。それは感情の爆発が逆に静まるくらいに。

「「進む雷 わが身の枷を外す鍵とならん!!」」

バチバチとウインダとアイリーンの身体に僅かな紫雷が迸る。

「制限時間は何秒だっけ？」

「明日に弊害を残さないなら、90秒が限度。最高でも120秒。」

「それだけあれば十分!!」

二人が会話している間にRDDは口から火炎弾を吐き出した。二人が避けたら、この周辺は一瞬で焼け野原になるだろう。

ウインダの前にアイリーンが立ち、アイリーンは杖に視認できるほどの烈風を纏わせた。

「てやああああ!!」

杖を両腕で握り締め、火炎弾を受け止める。そして、そのまま両腕を振りぬき……。巨大な火炎弾をピッチャーから投球されたボールのように見事に打ち返した。打ち返された火炎弾は見事にRDDにヒットする。

「…………RDDの火炎弾を打ち返すなんて初めて聞いたよ」

エアリアルの上には半分だけ呆れの念が籠っていた。それだけでは終わらず、RDDの巨体を殴ってダメージを与える。そして、まるで示し合わせたかのようにウインダの魔法の準備が終わると同時にバックステップで後退するアイリーン。

「雷鳴天を切り裂き 烈風戒めとなる!!」

夜空が突如として雲が覆い、ゴロゴロと雷鳴を轟かせる。そして、RDDの周囲にRDDの動きを制限するように竜巻が発生する。

「アイリーン!!準備できたよ!!」

「OK!!!3秒後に!!!」

「?、?、?!!」

ウィンダが杖を振り下ろすと雷がRDDに向かって一直線に落ちてきた。

RDDの身体に高圧電流が流れ、RDDの身体を一時的に麻痺させる。すでに役目を終えた竜巻は消失している。後はフロントアタッカーのアイリーンの仕事だ。

「でりやあああ!!!」

身体が麻痺しているため、一時的に無防備になったRDDの首元……正確には首元に付けられた首輪に向かってパンチを放つ。すると、首輪に輝が入り、粉々に砕け散った。それを皮切りにRDDも大人しくなる。そのことを確認した二人は魔法を解除し、身体を迸っていた紫雷が綺麗に無くなる。

「全力で殴ったから右腕が痛い」

「利き腕は左腕だから問題ないよ。というか、それを想定して右手で殴ったんでしょ?」

「まあね」

二人は意気揚々をハイタッチを交わした。お互いの健闘を称えるように。

二人が使った魔法はガスタの里に伝わる禁術級の魔法だ。身体に電気を走らせることで人為的に肉体のリミッターを解除し、一時的に爆発的な戦闘力を得るといふ荒業だ。

もちろん負担は大きく、二人の年齢では2分間以上使用すると身体にどんな影響を及ぼすか分からないといわれ、滅多に使わないようにカームに厳命されていた。

閑話休題

「RDDに真っ向から戦いを挑むなんてどうかしてるよ」

「無感情だから行動パターンが単調なんだよ。感情があったら真っ先に逃げ出すよ」

ウインダは苦笑いを浮かべながら呟いた。

「思いつきり殴ったけど、大丈夫？」

アイリーンが心配そうにRDDに尋ねると「気にするな」と首を左右に振った。
元が人間であっただけあって人語は話せないが、人語を理解することはできるようだ。

「それにしても……森がめちゃくちゃだね」

「「うん」

RDDが木々をなぎ倒してエアリアルを連れ戻しに来たため、そこに隕石が落ちたかのようにぽっかり穴が空いたように見える。

「G U U U U U」

ウィンダの言葉にRDDは申し訳なさそうに首を垂れた。

「気にすることないよ。諸悪の根源は明日にでも叩き潰しに行くから」

RDDの首を優しく撫でるウィンダだが、その背後には恐ろしい阿修羅が見えたような気がした。
思わずRDDも身体をビクッと震わせた。

(「わっ…!」)

エリアルもアイリーンも同じことを思った。

第6話 管理局（後書き）

レッドアイズが仲間になった。

第7話 突入

第7話 「突入」

簡単なあらすじ

ウインダとアイリーンが出会ったリチュア一族の魔法使い、リチュアII エリアル。彼女は管理局の施設から脱出してきた脱走者だった！！ エリアルからの情報でリーズがその施設に居ることが判明し、その施設に乗り込むことを決めた二人。しかし、エリアルを連れ戻す為にRDDが現れる。二人は管理局の非道な行いに怒りを覚え、二人は禁術の「雷神招来」を使用してRDDを管理局の呪縛から解き放つことに成功する。

バサッ

バサッ

バサッ

静かな暁の空に力づよい羽音が響き渡る。

どこまでも広がる森林の上空を管理局の呪縛から解き放たれたRDDが飛んでいた。

その背中にはガルドを肩に乗せたウィンダとアイリーンに加えて、エリアルも乗っていた。

「さすがにRDDに襲いかかってくる馬鹿は居ないか」

「RDDは龍族の中では最強といっても過言じゃないからね」

RDDに乗って研究所に向かう間、何度かインヴェルズの先鋭などを見かけたが、RDDが一睨みすると全員尻尾を巻いて逃げ去った。おかげで誰にも妨害されることなく、進んでいる。

「ねえ、エリアル。研究所の警備はどうなってるの？」

「数人の管理局員と……モンスターが数体。でも、モンスターのほうはもう感情を無くして完全に獣になってるから、見つけ次第容赦なく襲いかかってくるよ」

「じゃあ、アイリーン。方針はsearch&destroyで。」

「了解」

(この二人、絶対皆殺しにするつもりだ……!!)

エリアルは戦慄した。

エリアルがそんなことを考えている間に三人を乗せたRDDは管理局の施設（研究所）の上空に到着した。

「よし。アイリーン、エリアル。降りるよ」

「うん」

「いや、この高さから降りたら……」

現在の高度はだいたい100メートル。生身の人間がこの高度から紐なしバンジージャンプをすれば、間違いなく死にいたる。しかし、エアリアルは抗議などお構いなしにアイリーンはエアリアルの右手を掴んで紐なしバンジージャンプに身を投じる。

エアリアルの叫び声がドップラー効果で高くなりながら落下していく。地面との距離が1メートルぐらいになった時、急に落下が止まり、地面にゆっくりと着地した。

「ぜえ……ぜえ……ぜえ……本気で死ぬかと思った」

「私たちはガスタの一族だからあんな高さ何ともないよ」

「それよりもこの扉を突破する前に一戦交えないといけないらしいよ」

研究所の扉の前に見事に着地した三人だが、その三人の目の前に2匹の仮面竜が立ちはだかった。

しかし、通常の仮面竜よりも一回りほど大きく、瞳は血走っている。三人に続くように降りてきたRDDの威嚇にも怯えもしない。

「可哀想だけど……殺すしかないわね」

「うん。水の精よ わが手に集い一振りの剣となれ」

アイリーンの両腕に周囲の水分を凝縮して作り出された水の剣を装備する。

アイリーンが右腕を振ると水の剣は細く細く紐のようになり、仮面竜の片翼を切り落とす。高圧の水の鞭はダイヤすら切り裂くほど切断力が高い。ゆえに、仮面竜の片翼はバターのように切り落とされた。

鮮やかな返り血が剣に付着するが、新たな水がすぐに血を落とす。

「G u g y a a a a a a ! ! !」

片翼を切り落とされた仮面竜は痛みに悶え、暴れ回る。しかし、片翼を失ったことでバランスを保てなくなり、横に倒れる。

仲間が倒れたことに怒った片割れが三人に向かって火炎弾を放つ。

「逆巻く風よ　すべてを跳ね返す盾となれ。リフレクト・シールド」

ウィンドの魔法が発動し、風の壁が仮面竜の火炎弾を跳ね返す。しかし、炎属性である仮面竜に火炎弾はまったく効果をなさない。ウィンドの目的は攻撃ではなく、エリアルル魔法詠唱の時間を稼ぐことだ。

83

「水の精よ　敵を包みこめ」

周囲の水分が集まり、仮面竜を水牢の中に閉じ込める。呼吸ができずに仮面竜は苦しそうにもがくが、エリアルルはまったく気にせず魔法を強める。

「G u G a」

エリアルルが作り出した水牢の中で苦しそうにもがいていた仮面竜が

ぐつたりと大人しくなった。
それを確認するとエリアルは魔法を解除して水牢を水蒸気に霧散させる。

「じめん」

グサツ！！

アイリーンは謝罪しながら片翼の失った仮面竜の心臓を一突き。せめてもう苦しまないように、というアイリーンの慈愛なのかもしれない。

さて、門番も撃退した三人は改めて研究所に突入しようとするが、再び壁が立ちはだかった。

「どうやって入る？」

「強行突破。」

エアリアルは質問にアイリーンとウィンダは迷わず答えた。
二人の迷い無い返答にエリアルは「だよね」と呟いた。

「でも、どうやってこの扉を壊すか……」

三人の前に立ちはだかった扉は鉄製でかなり大きい。それに分厚そうだ。

その時、RDDが大きく咆哮を上げた。すると、RDDは体内の火炎袋から炎を絞り出し、最大出力で火炎弾を放った。

ドゴーンッ！！

RDDが放った最大出力の火炎弾はとても頑丈そうな見事に打ち抜いた。

それと同時に研究所の内部でけたたましい警報が鳴り響いた。

「うわ、面倒なことになりそう……」

「ぼやぼやしてないでさっさと進むよ。」

アイリーンとウィンダは風魔法で自分の身体を浮かび上がらせる。そして、アイリーンはエアリアルの手を掴むとそのまま全速力で研究所内部に突入した。

RDDは研究所を自由に歩き回れるサイズではないので、ガルドと一緒に待機だ。

「見つけたぞ、侵入者！！」

「風精 敵を切り裂く一刃の刃となれ」

淡々と詠唱を口にして三人の前に立ちはだかった管理局員に容赦なく攻撃するウインダ。
ウインダの魔法は心臓を狙ったはずだったが、目標が動いたため、右足を切断するだけに終わった。

「水精 剣となりて手を滅せよ」

エリアルが魔法を使って右足を切断された管理局員の心臓を水の剣で一突き。

そんなに狭くない通路の壁には血痕が飛び散り、床には鮮血の水たまりが出来上がっていた。

三人は死体を歯牙にもかけず研究所の奥へ奥へと進んでいく。

「分かれ道だ」

「エリアル、どっち？」

「左側！！」

「了解!!」

エリアルのご案内で分かれ道でも迷うことなく先に進めた。

「侵入「邪魔」　ぐがああああ!!!!」

立ちほだかる管理局員にまったく容赦しない。

ウインダとアイリーンはガスタの里を守るためにインヴェルズやリチュアの者を殺してきた。殺しを戸惑うことは里を危機に陥れることだ。だから、二人は殺しを戸惑わない。

「っ!!この先から何か大量に来るよ!!」

ウインダが何かを感じて警告した。

その刹那、炎を纏った空飛ぶトカゲのような生物　ヴォルカニック・バレットの大群が三人に向かって突進してきた。

「任せて」

アイリーンに掴まれたままのエリアルは逆の手で杖を振るう。

「荒れ狂う濁流よ 敵を押し流せ。タイダルウェーブ!!」

エリアルは魔法を発動させた。すると、エアリアルの魔力を受け取った水の精霊が小さな津波を起こした。小さいといっても狭いこの通路を十分満たすくらいの津波だ。弱点である水の前に為す術なくヴォルカニック・バレットは津波に押し流された。

「凄いね。水属性の特級魔法なんて初めてみたよ」

アイリーンはエアリアルの魔法に舌を巻いた。

三人が使う魔法にはそれぞれランクがあり、一般的に初級魔法・中級魔法・エンシエントスベル上級魔法・ハイ・エンシエントスベル特級魔法の四つに分けられる。この他にも禁術や古代呪文や高度古代呪文などもある。

「水属性しか使えないけどね。」

「まあ、これで奥まで進める!!」

・
・
・

・
・
・
・
・
・

.....

.....

それから五分後。

「ここが研究所を取り仕切る奴の部屋。みんなが捕えられてるのはこの部屋のさらに奥」

「つまり、この先に居る親玉を避けて通れないわけね」

「どっちにしろ.....わざわざ見つけて殺す手間が省けた」

三人は杖を構え、一際頑丈そうな扉を破壊した。そして、爆煙を通り抜けるように三人は親玉の部屋に突入した。

第8話 アイリーンの正体

第8話 「アイリーンの正体」

ドゴーンッ！！

爆音と共に研究所の中枢に飛び込むアイリーン・ウィンダ・エリアルの三人。

研究所の中枢には、中枢と呼ぶにふさわしいかなり大型のコンピュータが設置されており、白衣を着た黒髪の研究者が空間投影型キーボードを叩いている。

「……………ちっ。使えん奴らばかりだ」

黒髪の男性は忌々しそくに舌打ちすると椅子から立ち上がり、三人の方を向いた。

その時、三人はその研究者の瞳に狂気を見た。人を人として見ていない。本気で物を見るような目でアイリーンたちを見つめている。

正気ではない。

三人はそう思った。

「まあ、いい。実験材料が増えるのはありがたい。」

「その前にお前は……殺す」

ウインダとアイリーンは研究者に向けて濃密な殺気を飛ばす。しかし、研究者は普通の人なら動けなく殺気の中、ケラケラと笑った。

「怖い怖い。それにしても……どうして君がそっち側に居るんだらうね？」

“高町なのは”

「えっ？」

研究者はアイリーンの方に視線を向けた。

「いや、さっきの戦闘からすると……記憶を失ってるのかな？」

「お前、アイリーンのことを知っているのか!？」

「なるほど。予想は当たりのようだ。なら、教えてやろう。

彼女の名前は“高町 なのは”。管理局屈指の実力者であり、“不屈のACE OF ACE”と謳われた少女さ。つまり、君は我らの同胞なのだ。傑作だよ。一年半前に任務中に行方不明となり、死亡判定された魔導師にこんな場所で会えるなんて」

(私が……管理局の……)

研究者は大層愉快そうに下劣な笑いを浮かべ、ウインダムもエリアルも信じられないという表情をアイリーンに向けていた。しかし、一番信じられないのはアイリーン本人であった。

(違う。私は……私は……)

「しかし、君は同胞である管理局員を殺した。君の権威の失墜は免

れないだろう。

そこで取引といこうじゃないか。その二人の異端児をこちらに引き渡してくれるなら、ここでの一件は無かったことにしよう。」

研究者はアイリーンに手を伸ばす。

(私は……………私は……………)

アイリーンは俯いたままだった。ウィンダもエリアルも心配そうにアイリーンを見つめている。

貴女は何のために管理局に入ったの？

アイリーンは気が付くと真っ暗な空間に居た。そして、目の前に居るのはもう一人のアイリーン。いや、高町 なのはと言ったほうが正しいのかもしれない。

(私は……………誰かを助けるため……………)

違うよ。貴女は捨てられたくないから管理局に入った。

(そうだった……………のかな?)

でも、それは管理局に居た時の貴女（私）。じゃあ、この世界に来てから何のために闘ってた？

“高町　なのは”とアイリーンは問答を続ける。

（私は……ガスタのみんなを守りたかった！！みんなの笑顔を守りたかった！！）

アイリーンは初めて声を荒げた。アイリーンの様子に“高町　なのは”はにっこりと笑顔を浮かべた。

じゃあ、するべきことはわかってるね？

（うん！！）

「さあ、どうする？まあ、聡明な君のことだ。異端児を売り渡すのは当然だろう」

研究者はアイリーンが二人を裏切ることを確認していた。

高ランク魔導師には、管理局を絶対正義とみなすように洗脳型の暗示が刻まれている。

だから、管理局員であるその研究者はアイリーンが管理局に戻ることを確信していた。管理局にとって自分たちは絶対正義。ゆえにどんなことも許されると考えている。

「進む雷 わが身の枷を外す鍵とならん（ボソツ）」

それからは一瞬の出来事だった。横に居たアイリーンが消えたかと思ったら、目の前の研究者の心臓を右手を的確に貫いていた。肉を突き破り、心臓を突き破ったアイリーンの右腕は赤く染まっていた。

「馬鹿な・・・・・・・・何故・・・・・・・・？」

「私は“高町 なのは”だったかもしれない。でも、今の私はアイリーン。ファーウオニウスだ！！」

ズシュッ！！

右手を引っこ抜くと鮮血があふれ出し、研究者は倒れ込んだ。

「アイリーン・・・・・・・・」

「大丈夫だよ、ウィンダ。」

心配そうに尋ねてくるウィンダにアイリーンはいつもどおりの優しいような頬笑みを浮かべて安心させるように返答した。

「記憶、戻ったの？」

ウィンダの質問にアイリーンは首を左右に振った。

「少し戻っただけ。完全には戻ってない」

「ぐぞっ……ただでは……すまざんぞ」

「「「!!」」」

何と研究者は心臓を貫かれたのに生きていた。もっとも虫の息だが。

「この研究所から……生きて帰さん!!」

研究者は最後の力を振り絞ってポケットの中に忍ばせておいた研究所の自爆スイッチを押した。

研究所内にアラーム音が鳴り響き、避難を促す放送が流れる。

「ウインダ!!」

「うん!!」

ウインダとアイリーン、エアリアルは中枢ルームの扉を抜けてリーズが捕まっているらしい牢獄に向かった。

「お姉ちゃん!!」

ウインダは重い扉を勢いよく開けた。

その部屋には三人の人間が捕まっていた。黒い暗殺者のような衣装

に身を包んだラヴァルの少女にフリルをあしらった衣装に身を包んだリチュアの女性、そして、ガスタの民族衣装に身を包んだ先端がオレンジ色に染まった緑髪の女性がラヴァルの少女に膝枕されて横たわっていた。

「ウィンダ………?」

ウィンダの実姉、リーズは弱々しい口調でウィンダの名前を呼ぶ。ウィンダは感情のままにリーズに抱きついた。

「遅いわよ、エリアル。」

「うるさい」

「二人とも………もうすぐ此処が倒壊するってこと、忘れな
い?」

アイリーンは確認するように二人に尋ねる。

「「忘れてた!」」

「忘れてたの!」?」

倒壊まであまり時間が無いのに危機感が大して感じられない三人。

「早く脱出しないとー!ー!」

「待ってー!ー!」

脱出しようとするトラヴァルの少女が急に止めた。

「隣の部屋にも捕まってる子がいるの!ー!」

「………わかった。ウィンダ、先に脱出して。エリアルはみんなを連れて行って」

ウィンダとエリアルは頷くとアイリーンを置いて先に研究所から脱出した。

ゴゴゴゴゴッッッ!ー!ー!

研究所内に地響きが響いた。それだけではなく、天井や遠くのほうで爆発音が廊下の壁を反射してアイリーの耳まで届く。おそらく、この研究所に仕掛けられていた爆弾が爆発しているのだろう。

(これは……………さっさと脱出しないと拙いかな?)

アイリーンはリーズたちが囚われていた隣の部屋に入った。

「むにゃむにゃ……………もう食べれないよ」

隣の部屋では、ウィンダよりも少し薄い緑髪の少女が涎を垂らしながら眠っていた。

ダルクたちと同じ霊使いの民族衣装を身につけているので、おそらく里に居なかつた風霊使いだろう。

あまりにも緊張感のかけらもない様子にアイリーンは愕然となるが、気を持ち直して取り合えず、この研究所がいつ崩れるかわからないので、風霊使いを背負って脱出しようとする。

その時、より一層激しい揺れが研究所を襲った。

ピシピシ……………

爆弾のせいで脆くなっていたのか天井に罅が入り、天井が崩れてそ

の瓦礫がアイリーンに降りかかってくる。魔法を発動させる暇もない。アイリーンは風霊使いの少女だけでも逃がそうとする。

「……………バーンアウト」

急に突風が吹き荒れ、瓦礫を持ち上げるほどの上昇気流が発生した。

「ふわ〜あ。危ないところだったね〜」

「あ、ありがと……………。というか、起きてたの？」

「ついさっき起きた。それよりも魔法を維持するのも大変だから、さっさと脱出しない？」

「そうだね」

アイリーンは風霊使いの少女を背負ったまま研究所の出口を目指した。

倒壊が予想以上に進んでいたため、通路が瓦礫に埋もれていたりしたが、わずかな隙間を魔法で無理矢理大きくして何とか出口まで進んでいた。

「ちっ」

ウイン（保護した風霊使いの名前）を背負ったアイリーンは舌打ちした。

ゴール目前に立ちはだかつた瓦礫によつて構成された壁が二人の脱出口を塞いでいた。かなり大きな瓦礫で塞がれている上に今までのように隙間がない。

（多分今まで通つてきたルートはもう瓦礫の下。この壁を突破するしかない！！）

「正直、この魔法は魔力の消費が激しいから使いたくはなかったんだけど……」

アイリーンは杖を構えた。

「大いなる風 静かなる風 今荒れ狂い 全てを吹き飛ばす強き烈風となれ。」

アイリーンの残つた魔力がごっそりともつて行かれる。

その代わりアイリーンの杖の先には竜巻のように荒れ狂う力強い風が渦巻いていた。

「おお〜。風系統の上位魔法かあ〜」

「サイクロン”!!」

ドゴーンッ!!!!

杖の先から開放された風が竜巻となって瓦礫を見事に吹き飛ばした。それと同時にアイリーンが居た場所が崩れ始める。

「最大加速!!」

アイリーンは残った魔力で研究所から無事に脱出した。アイリーンが脱出すると同時に研究所は無残に崩れ落ちた。

「か、間一髪……」

「お姉ちゃん、凄いね」

アイリーンは生死の危険を感じていたのはウインはなんとも無邪気だった。

「GURU」

「RDD、他の皆は？」

「GRUU」

「後から合流して来い”。わかった。」

RDDが言いたいことを理解してアイリーンはウインを背負ったままRDDの背中に飛び乗った。

RDDは強靱な二翼を羽ばたかせて大空に飛び上がった。

第9話 開闢の剣

第9話 「開闢の剣」

簡単なあらすじ

突入した研究所でアイリーンの正体が管理局のエースであった高町なのはであることが判明した。しかし、アイリーンは昔よりも今を選び、自分の守りたいモノを守るために戦うことを心に誓った。ウィンダは姉のリーズと再会したが、研究所が倒壊を始めた。アイリーンは一足遅れて風霊使いの少女、ウインを連れて研究所を脱出する。そして、出口で待っていたRDDに乗ってウィンダの元に向かった。

「魔力枯渴が酷い。里の“神域”に連れて行かないと……」

研究所からかなり離れた場所にウインダたちはひとまずテントを張って野宿の準備をしていた。

その間、ウインダはリースの容態を診察していた。

「リースは実験被験者の対象が私たちに回ってくると同時に風の防壁で私たちをずっと守ってくれたんだ」

「食事も最低限しか与えられてなかったし、一応アタシらも魔力を分けたんだけど……」

「それでも魔力の消費に回復が追いつかなかった。」

(まったく……無茶すぎだよ)

子供の頃から変わらず他人思いなリースの行動に苦笑いを浮かべるウインダ。

しかし、状況は最悪だ。エリアル姉であるリチュアの少女、リチュア・エミリアとラヴァルの少女、フレイ・ラヴァルの二人は魔力をリリースに与え続けていたので魔力が空。

比較的魔力が残っているのは、ウインダとエリアルだが、三人を庇いながら戦闘するのだ不可能だ。

ウインダは一刻も早くアイリーンが戻ってくるのを待ち望んでいた。

「リーズは……大丈夫なの？」

フレイはおどおどとした様子でウインダに尋ねる。

「ガスタの“神域”に行けば、すぐに回復するよ」

「そう……よかった。」

フレイはほっと胸を撫で下ろした。リーズのことを心の底から心配していたようだ。

その時、大きな羽音を立ててアイリーンとウインを乗せたRDDが野営地に到着した。

「ウインダ！ ！ 霊使いの里に居なかった風霊使いを連れてきたよ」

RDDがドスンッと大きな音を立てて着地すると、アイリーンはウインを背負ったままRDDの背中から飛び降りて見事に着地した。

「お疲れ様、アイリーン。早速だけど、魔力残ってる？」

「私も空っぽ。研究所を脱出するのにほとんどの魔力を使っちゃったよ」

「となると……敵に襲われたときにまともに戦えるのはエリアルと私とウインの三人だけか……」

(こうなったら、敵に襲われないことを願っただけだね)

しかし、ウインダの願いは無情にも届かなかった。

森の遠方からドシンツ！！ドシンツ！！と音を立てて“何か”が接近してきていた。

ウインダは戦うことができないアイリーンたちを後ろに下がらせて魔力が残ってるウインとエリアルは前に出た。

ドシンツ！！ドシンツ！！という足音と一緒に木々をなぎ倒すような音が全員の耳に届いた。

(インヴェルズじゃない。なら、一体……)

ウインダの頭脳が答えを出す前に敵が姿を現した。

ゴリラよりも大きい図体を持つ獰猛な猿類モンスター。テリトリーに入った標的に集団で襲い掛かり、逃げ出しても追いかけてくることから森の番人と恐れられるモンスター。その名は「グリーン・バブーン」。

「「「「くおおおおおッッッ!!!!」「」「」

グリーン・バブーンはRDDの威圧感にも身を竦ませず、大声で咆哮を上げた。

「この戦力でこいつらって………最悪」

ウインダは自分の薄幸を呪った。

グリーン・バブーンは単体でももの凄く強い。それに加えて今回は五体の集団だ。

さらに、こつちはまともに戦える戦力がウインダを含めた三人とRDDだけ。絶対的は不利は動くことない。

「RDDに乗って逃げればいいんじゃないの？」

「無理。グリーン・バブーンは何処までも追いかけてくるから。」

「じゃあ、ここで倒すしかないわけだ。」

三人は杖を構えた。それと同時に五体のグリーン・バブーンが棍棒を振り上げて襲い掛かってきた。

「風よ唸れ 雷となって敵を貫け。ライトニング・ブレード!」

「ぐがあ!」

ウインダは風の上位属性である雷の剣を放つが、グリーン・バブンは棍棒でその剣を消し飛ばした。

「ちつ。烈風よ 敵を切り裂け!」

続けざまに烈風の刃を放つが、グリーン・バブンは脅威的な再生能力を持っているので、大したダメージを与えられない。

「サイクロン!」

ウインはアイリーンと同じ風の上級魔法を使ってグリーン・バブンを吹き飛ばす。

「水精よ 敵を撃ちぬけ」

何とか一体を退けたが、グリーン・バブンはまだ4体残っている。エリアルは水弾を放つが、ウインダの「ライトニング・ブレード」

と同じようにかき消されてしまった。

「ぐがああああ!!」

反撃と言わんばかりにグリーン・バブーンは棍棒を振り下ろした。

「威力が高くて攻撃が遅いなら!!」

「ウインダ!!」

「えっ?」

初撃を回避したウインダにもう一体の攻撃が襲った。不意打ちを受けたウインダは防御も出来ずにそのまま木に叩きつけられる。

「があっ!!」

ウインダはそのまま意識を失った。意識を失ったウインダに止めをさそうと一体のグリーン・バブーンが近づいてくる。

「アクアバレット!!」「ライトニング・ブレード!!」

気絶しているウィンダに近づけさせまいとエリアルとウインの二人は左右から牽制するが、グリーン・バブーンは見向きもせずウィンダに近づいていく。

(このままじゃあ、ウィンダが………)

助けに行こうにも助けに行けないアイリーン。

元々、あの3人で5体のグリーン・バブーンに立ち向かうことが無謀だったのだ。

3人は後衛型魔法使いなので普通前衛が存在する状態で高威力の魔法を使うのが主流だ。つまり、前衛が居ないこの状況でグリーン・バブーンに立ち向かうのは無謀だったのだ。

(私は、みんなを守るために魔法を習得したのに………。肝心な時に使えないなんて、こんなの無いよ!!！)

アイリーンは首からぶら下っている深紅の宝石を祈るようぎゅっと握り締めた。

(レイジング・ハート、お願い。私に………力を貸して!!！)

アイリーンは心の底から祈るが、長年の相棒は壊れているのか答え

てくれない。

その間にウインダに死をもたらす死神が近づいてくる。

「お願い！！私に、力を！！ウインダを助ける力を！！」

《・・・・・・・・》

「ウインダは・・・・・・・・大切な家族なの！！」

その刹那、黒い光と白い光がアイリーンの両手が包み込んでいたレイジング・ハートから放たれた。

その眩い閃光にグリーン・バブーンたちも動きを止めた。

《貴女の願いは何ですか？》

「私は守りたい。ガスタの里のみんなを、助けを求めている人を、私は助きたい。」

救われぬモノに救いの手を。それが私の願いだ！！」

《……その言葉に偽りはありませんね？》

レイジング・ハートの言葉にアイリーンはしっかりと頷いた。

《高町　なのは。いえ、アイリーン＝ファウオニウス。貴女を“開闢の剣”の主と認めましょう》

その刹那、アイリーンの目の前に一本の剣が顕れた。

まるで神話に出てくるような神々しさを感じさせるその剣には膨大な魔力が詰まっていた。

アイリーンよりも少し長いサイズで形は独特で一見すると包丁のような形だ。その銀色の刀身には溝が彫られており、黒い球体のはめ込まれており、もう一つの球体をはめ込むように穴が開いている。

《マスター、私をその窪みに》

レイジング・ハートに言われるがままにアイリーンは球体のレイジング・ハートをその穴にはめ込んだ。

すると、白い閃光と黒い閃光がその剣　開闢の剣に集まってく。そして、開闢の剣の柄をしっかりと握り締めてアイリーンは天に掲げる。

「我　守護する力を求める者なり。」

契約の元にその力を顕現せよ。

闇は全てを飲み込み 光は全てを照らす

我 不屈の心選ばれし者

開闢の剣よ 我に力を!!」

開闢の剣が吸収した白と黒の光がアイリーンの身体を包み込む。そして、白黒の光はアイリーン専用の鎧を構築した。ごつごつした騎士甲冑ではなく、とてもスリムな闇色の鎧。女性用なのか腰当てから白く長い布が具足を装備した下半身を覆っているのが特徴だ。

「ぐがあ!!」

本能的にアイリーンが自分に死をもたらす者だと理解したのかウインダに襲い掛かろうとしていたグリーン・バブーンAは標的をアイリーンに変えた。

ガキンッ!!

アイリーンは右腕に装備された盾でグリーン・バブーンAの棍棒を受け止めていた。

そして、空気を切るような音が聞こえたかと思ったら、グリーン・バブーンAの右腕がいつの間にか切り落とされていた。

「ぐおおおおおおおー!!」

「妖明流奥義 閃!!」

ドスッ!!ドスッ!!と目にも見えないスピードでそのグリーン・バブーンAの顔と心臓は見事に貫かれていた。急所である二箇所をほぼ同時に貫かれたグリーン・バブーンAはそのまま絶命した。

「くくくくくおおおおおおおんっつ!!!!!!」

仲間が殺されたことに怒り狂った残りのグリーン・バブーンBCD Eは一斉にアイリーンに襲い掛かってくる。

「妖明流抜刀術 絶影」

長い長剣を日本刀のように軽々と扱い、見事な抜刀術でグリーン・バブーンCを倒すアイリーン。

不思議なことに返り血をかなり浴びているはずなのにアイリーンの鎧も剣も血の一滴も付いていなかった。

「逃げたいなら逃げなさい。私は背後から襲い掛かるようなことはいけません」

アイリーンの口から発せられる最後通告。

しかし、勇敢なのか無謀なのかグリーン・バブーンBDEは諦めずにアイリーンに向かっていった。

「妖明流新奥義 開闢双破斬！！」

三回の空気を切る音がこの場にいる全員の耳に届いた。

そして、アイリーンはそのまま開闢の剣を背中中の鞘に戻した。その刹那、残っていたグリーン・バブーンBDEは一斉に崩れ落ちた。圧倒的な力にエアリアルたちは言葉が出なかった。

「っ、疲れた……………」

そう言い残してアイリーンは意識を失って倒れてしまった。

第9話 開關の剣（後書き）

禁止解除記念にOCGの開關（といっても本人でないが）を登場させました。

アイリーンの鎧は開關の鎧にロングスカートを付けくわえたモノです。

しばらく一週間に一回の更新になりそうです。

第10話 決意の元に新たな旅立ち

第10話 「決意の下に新たな旅立ち」

簡単なあらすじ

リーズたちを無事に助け出し、アイリーンとも合流したウィングたち。

しかし、息をつく間もなく、森の番人グリーン・バブーンに襲われた。まともに戦える者が居ない絶体絶命の危機にアイリーンの祈りに反応して「開闢の剣」がアイリーンの前に現れた。

「開闢の剣」の正式な主に認められたアイリーンは圧倒的な力でグリーン・バブーンを倒す。その後、アイリーンは「疲れた」という言葉を残して意識を失った。

「ん……」

意識を失っていたアイリーンは目を覚ました。

しかし、目覚めた場所は現実世界ではなかった。自分の周りに広がるのは漆黒のような闇。右も左も上も下もわからず、アイリーンは自分が沈んでいるのか浮かんでいるのかまったくわからなかった。

「ここは……何処？」

G u o o o o o o n ! ! ! ! !

真っ暗な空間に虎のような猛獣の咆哮が響き渡った。

アイリーンの視界が捉えたのは、新緑の草木を彷彿させる煌めく緑色の鱗に覆われたワイバーン型のドラゴンだった。

全身に風を纏い、何も無いはずの空間なのに風の流れが感じられるぐらい可視化された風を纏っていた。

開闢の使者よ。翡翠の龍玉を探せ。

「翡翠の……龍玉……？」

そして、その龍玉で我を目覚めさせよ

したとされる。

この英雄はヴァイロンとインヴェルズが争う時代に降臨した開闢の使者のことである。

(何で古の英雄が持ってたような剣をアイリーンが持ってるわけ?)

アイリーンが持っている剣が真正銘の「開闢の剣」であることはエリアル、エミリアの検討で判明している。判断根拠は秘められた膨大な魔力で伝承に残る形状。

「ん……………」

「あ、起きた?」

「ういんだ?あれ、わたしは……………」

「アイリーン、グリーン・バブーンを倒した後急に倒れて三日間眠ったままだったんだよ?」

「ああ……………それでこんなにも身体がダルイわけだ」

アイリーンは身体を起こすと軽くストレッチをして、凝り固まった

身体をほぐし始めた。

「今は何処に向かっているの？」

「ガスタの里。姉さんを神域まで連れて行かないと。

あ、RDD。そこにゆっくり着地して」

「GRU」

RDDは長い首を少し縦に動かして了承の意を示した。RDDはゆっくりと高度を下げていき、大地に足をつけた。それと同時にウインダはリースを背負ってRDDから飛び降りる。

「ウインダ、私はもう少し休憩してから向かうよ」

「わかった」

ウインダはリースを背負ったままガスタの里の門をくぐった。アイリーンはウインダが里に入って行ったのを確認すると近くにあった樹に腰かけた。

「ねえ、レイジングハート。貴女は一体何者なの？」

《私は開闢の剣の管制人格です。古より開闢の剣を持つにふさわしい者を探してきました》

「じゃあ、開闢の剣って？」

《世界の創造と終焉を司る剣です。世界を作ることと滅ぼすこともできます。》

「あゝ……………主の選定が必要なわけがわかったよ。」

《マスターはこの開闢の剣を振るうのに値する人です。私が言うのだから間違いありません！！》

「あはは……………ありがとう」

《それよりもこれからどうするのですか？》

「取り合えず、管理局の施設を潰し回る。その後で管理局を完膚なきまで潰す」

レイジングハートの質問にアイリーンははっきりと答えた。
今のアイリーンには親友と敵対することなど微塵のためらいもない。

「アイリーン」

レイジングハートとアイリーンが話しているとウィンダが戻ってきた。

「ウィンダール様が呼んでる。話したいことがあるらしいよ?」

「わかった」

・・・

・・・

・・・

・・・

アイリーンが通されたウィンダールの屋敷の中には居たのは里長で

あるウィンドールだけではなかった。

アイリーンの剣の師である十六夜 妖明もこの場に出席していた。それ以外にも、里の方針を決める首脳陣カームなども勢ぞろいしていた。

「随分と早い帰還だったな。」

「私も少々予想外でした。」

「……ウィンダから事情は聞いた。それでこれからどうするつもりだ？」

「管理局を潰しに行きます」

「一人でか？」

「はい。これは外の世界の問題です。この世界を巻き込むわけにはいきません」

「アイリーン、今回の事態はこの世界も無関係でいられない。」

ウィンドールとアイリーンの会話に今まで黙っていた銀髪の女性、十六夜 妖明が口を挟んだ。

「昨日、リチュアから同盟の提案が来たのよ。」

カームが言うには、アイリーンが帰ってくる一日前にリチュアの里から緊急連絡が届いてきた。

その内容は要約すると「管理局が邪魔だから、一緒に倒さない？ 双方にメリットはあるし」というものだった。同盟が本決まりではないが、本日双方のトップが話し合いを行うらしい。

「というわけで、貴女一人の問題じゃないの。差し当たって、貴女にお願いがあるの。」

「？」

「氷結界の龍に協力を取り付けてきて」

「！！！！」

カームからアイリーンに対するお願いにアイリーンは目を丸くした。「氷結界の龍」は「歩みを止めた世界」という氷結世界に今もなお生息している三匹の龍のことだ。

その力はすさまじく、誰もが求める絶対勝利の力の象徴と言っても過言ではない。しかし、その三頭の龍は争いを望まず、「歩みを止

めた世界」で静かに暮らしている。

「管理局を打ち倒すには、氷結界の一族の力……いや、すべての種族が力を合わせる必要がある。」

「……わかりました。引き受けます」

「アイリーンには私が付いて行く。」

カームが立ち上がった。

「頼んだぞ。アイリーン、カーム」

「はい。」

ウインダールの屋敷を出たアイリーンはカームとひとまず別れて先に里の入り口で待機していたRDDの所までやって来た。

「RDD、もうしばらく私に付き合ってもらおうよ。」

アイリーンはRDDの頭をなでる。すると、RDDは一鳴きして了承の意を示した。

ちなみに、今回の任務はウィンダ不参加だ。ウィンダはリースを神域に連れて行って、リースの看病もしないといけないからだ。

「お待たせ、アイリーン」

「はやっ！！」

「昨日から準備してたのよ。こんなことになるだろうと思って」

カームが自宅から取って来たのは、少し大きな黄土色のリュックサックだ。

どうやらその中に色々入っているらしい。

「さあ、世界を変える一歩を始めましょうか」

カームとアイリーンはRDDに乗ってガスタの里の南に存在する時間が止まった世界、“歩みを止めた世界”に向かって旅立った。

第10話 決意の元に新たな旅立ち（後書き）

内容が薄くてすみません。

第11話 歩みを止めた世界

第11話 「歩みを止めた世界」

簡単なあらすじ

ウィンダの姉、リーズの治療のためにガスタの里に戻ったアイリンたち。

アイリンたちが戻ったときには事態は急展開を迎えていた。なんとガスタの宿敵？であるリチュアが管理局を倒すために同盟を申し込んできたのだ！！

一方、里に戻ったアイリンに里長ウィンダールよりある任務が言い渡された。それは“歩みを止めた世界”をずっと守っている氷結界の龍に協力を取り付けることだった。

旅の同行者はガスタの天才、カーム。二人はRDDに乗り、“歩みを止めた世界”に向かった。

「さすがRDD。飛行速度も他の龍と比べ物にならないね」

「この調子だとあと2分ぐらいで付きますよ、カームさん」

アイリーンの言葉に不服だったのか、カームは表情をムツとさせた。

「ねえ、アイリーン。ここはガスタの里じゃないんだけど？」

「？」

「だ・か・ら！！旅の間は昔みたいにお姉ちゃんって呼びなさい！！」

「へ？でも……………」

「呼ばないと……………こうだ！！」

カームはガントレット（付加能力：肉体強化）をつけた右腕でアイリーンの頭をがっちり掴み、じわじわと握力を強めていく。俗に言うアイアンクローだ。

ちなみに、カームが装備しているガントレットは装備すると身体能

その刹那、RDDが甲高く吼えた。
二人の肌を撫でる風に冷気に混じりこみ、二人の肌を刺す。

「見えてきたわね」

「うん。」

カームとアイリーンの視線の先には木々も人も魔物も精霊も凍りつ
いた一面氷の世界が広がっていた。

その氷の世界こそが氷結界の龍の縄張りであり、二人の目的地“歩
みを止めた世界”である。

・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「地上に降りても寒いわね。」

「うん。」

カームとアイリーンは“歩みを止めた世界”との境界線に降り立った。

まだ敷地内に入っていないというのに身を凍らせるような寒さが二人に襲い掛かっているはずなのだが、二人はあんまり気にした様子はない。

「でも、レイジングハートに頼んで耐寒結界を張ってもらってるのに寒さを感じるなんて……」

「アイリーンの魔力が切れて耐寒結界が切れたら一瞬で凍死するわね」

カームは冷や汗を流した。

現在、二人はアイリーンの背中に背負われた開闢の剣レイジングハートが展開している耐寒結界に守られている。氷点下の温度でも耐寒結界に守られていると寒さを感じないのだが、その気温はソレを下回るらしい。

「RDD、此处で待っててね？」

「GRUUU」

RDDは一鳴きして長い首を縦に振った。

そして、開闢の剣を抜刀し、戦闘準備を整えるアイリーン。カームも魔法触媒である少し大きい杖を握る。

「さむっ！！」

“歩みを止める世界”との境界線を一步跨いだ瞬間、レイジングハートの耐寒結界に守られていた二人に先ほどとは比べ物にならないほどの寒気が襲い掛かってきた。

「レイジングハート、耐寒結界の効果を最大まで上げて！！」

《All right》

アイリーンの魔力と引き換えに二人を襲っていた寒気が徐々に引いてきた。

「うっう……凍死するかと思った」

「確かに。」

アイリーンは念のために開闢の鎧を纏う。
そして、周囲を見渡した。

「伝承に聞いてた通り何もかも凍ってるね」

「精霊も人もモンスターもありとあらゆる生命の営みをも凍りつかせる。それが氷結界最強の龍 トリシューラの力だよ」

“歩みを止めた世界” というのは、かつていくつもの種族がひしめき合う群雄割拠の地域だった。

この地域になぞの未確認種族「ワーム」が襲来。その侵略者に立ち向かうためにこの地域の部族は団結してA・O・J - 正式名称：アーリー・オブ・ジャステイス を組織した。

A・O・Jは「ワーム」に対抗するためにいくつモノ機械兵器を生み出した。しかし、A・O・Jが優勢に転じたすのと同時に魔界に君臨していた部族「魔轟神族」が地上に現れた。しかし、「魔轟神族」は何もせず静観していた。

そして、「ワーム」も最終兵器である「ゼロ」と戦場に投下。A・O・Jは何とか「ゼロ」を破り、世界は「ワーム」の脅威から解放された。しかし、今まで静観していた「魔轟神族」が急に地上を侵略し始めた。度重なる異民族の侵略に終止符を打つべく、「氷結界」は封印されていた最後の龍の封印を解除した。だが、封印から解放された龍は「氷結界」の制御下を離れて暴走。

結果、その地域は溶けない氷に覆われてその歴史の歩みを停止させ

た。これが現在の“歩みを止めた世界”の誕生である。

閑話休題

「お姉ちゃんは氷結界の龍を見たことあるの？」

「いや、そこまで戦闘が激化する前に私は里に戻ったから知らないわ。」

そんな他愛の無い会話をしながら、二人は“歩みを止めた世界”の奥へ奥へ歩いていく。

一面銀の氷に覆われたその世界は生命の息吹すらも凍りつかせている。

そして、カームとアイリーンは氷付けになった祭壇のような場所にたどり着いた。

「これは………氷結界の祭壇？」

「でも、凍り付いてるね。」

「まあ、周りがこんな様子じゃ仕方ないでしょ。」

そう言つて祭壇の前から立ち去ろうとしたとき、大きな羽音が聞こえてきた。

外の人間よ、何のようでこの場に来た

「「!!」」

カームとアイリーンの目の前に現れたのはRDDと同等のサイズのドラゴンだった。

三つの首と顔を持ち、全身に近づくものを全て凍らせてしまいそうな冷気の鎧を纏い、その巨体を大きな一対の翼で浮かび上がらせているそのドラゴンこそ、氷結界最強の3番目の龍 トリシューラだった。

「私たちは貴方にお願いがあつてきました」

トリシューラから放たれる威圧感をもろともせずアイリーンはトリシューラに交渉する。

ほう………。私のプレッシャーをもろともしないとは。

気に入った!!

突然、トリシューラの姿が変わる。圧倒的な力量差と威圧感を感じさせるドラゴンの姿から人間の男性の姿に。

「お前たち、私の生涯の伴侶になれ」

人間の姿になったトリシューラはいきなりそんなことを言い出した。

「……………は？」

トリシューラの言葉に二人は耳を疑った。

「この身も独り身で居るのは寂しくてな。いい加減伴侶が欲しかったところだ。」

「え、えつと……………」

「何女を口説いてんだこのバカ兄貴!!」

「ぶべらっ!!」

そんな怒鳴り声と共にトリシューラは中華風の衣装に身を包んだ。20歳前後の女性に蹴り飛ばされた。

「このバカ兄貴！！少しは人の話を聞く事を覚えやがれ！！
相手の事情を聞きもせず女を口説くんじゃねえ！！」

「実の兄を蹴り飛ばすとは何事か！？お前をそんな風に育てた覚えはないぞ！！」

「邪魔だからすつこんでろ！！」

追撃のローキック。女性が放ったローキックはトリシューラのみぞおちにクリティカルヒット。
しかも、ありえないくらいのが力が込められていたのかトリシューラはそのまま吹き飛ばされた。

「はあ………。ごめんね、驚かせて。」

「え、えつと……。」

「自己紹介が遅れたね。あたいはブリューナク。こんな形だけど、れっきとした氷結界第1の龍さ」

「アイリーン＝ファウオニウスです。」

「同じくカーム＝ファウオニウスです。」

「アイリーンにカームね。それで貴方たちはどうして此処に？
自慢じゃないけど、ここには何も貴重なモノは残ってないよ」

「いえ、私たちは氷結界の力を借りに来ました。」

「……理由を聞こうか」

アイリーン、事情を説明中……

「なるほどね。管理局に喧嘩売るためにあたいたちの力を……
いいよ。条件付であたいたちの力を貸してあげるよ」

「条件？」

カームが聞き返す

「ああ。条件っていうよりも見返りだな。実は管理局にこの地域の世界の氷を溶かす剣があるんだ」

「……」

カームとアイリーンは驚いた。

トリシューラの氷は炎の眷属であるラヴァルの一族すらも凍りつかせた。ラヴァルの一族にも溶かせない氷を溶かす術が存在することなど二人は耳にしたことがなかった。

「名前は“煉獄の魔剣レーヴァテイン”。新しい世界を作る“開闢の剣”とは対照的に世界を終わらせる力を秘めた剣だ。あんたたちがその剣を管理局から取り返してくれたなら、あたしらは喜んで力を貸す。」

「でも、管理局に行く術はあるの？」

「ああ。A・O・Jが作った転移装置が残ってる。それを使えば、管理局までいけるはずだ。」

それで、どうする？引き受けるか、引き受けないか。」

「引き受ける」

「よしわかった。じゃあ、あたしについてい。」

第11話 歩みを止めた世界（後書き）

擬人化ブリューナクとトリシューラが登場。性格が少しおかしいことになっていますが、気にしないでください。

第12話 思わぬ再会 IN管理局

第12話 「思わぬ再会 IN管理局」

簡単なあらすじ

カームと共にトリシューラの暴走によって凍りついた世界 歩みを止めた世界 に向いたアイリーン。

そこで氷結界第3の龍トリシューラと氷結界第1の龍ブリューナクと出会った。

管理局打倒のための協力条件としてブリューナクからある条件が出された。その条件とは、管理局の奪われたままの“煉獄の魔剣レィヴァテイン”を奪い返すという内容だった。

カームとアイリーンはその条件を引き受け、ブリューナクの案内で以前A・O・Jが開発した転移装置の場所に向かった。

コツ コツ コツ コツ

ブリューナクの先導で凍りついた地下への階段を下りていくカームとアイリーン。

三人の靴音だけが狭い通路の中に響き渡る。

「あの………ブリューナクさん。」

「なんだい？」

「交換条件があるとはいえ、どうしてもすんなり協力してくれたのですか？」

「まだ正式に協力すると決まったわけじゃないけど………。」

「まあ、管理局が減れば、この世界の争いが一気になくなるからだ。」

「管理局が減れば、私たちは別の次元世界に進出することができ。それによって、種族間の争いの原因がなくなる」

カームは静かに呟いた。

この世界の種族が争っているのは、ガスター族の本拠地ミストバレ
ー湿地帯など資源が豊かな場所を求めているからだ。もし管理局が
滅びれば、数多の次元世界に進出することができるようになり、争
う必要なく資源豊かな大地が手に入るかもしれないのだ。

「あたいもバカ兄貴も戦争なんて嫌い。だから、交霊師に頼んで転
移装置を作らせたんだ。結局無駄になっちゃったけど」

「……………」

寂しそうなブリューナクの表情を見た二人は少し黙り込んだ。

そんな会話をしている内に三人は地下に作られた転送室にたどり着
いた。周りの床には氷がへばりついているにも関わらず、中央に設
置された転送装置はきちんと稼働していた。

「座標を設定すればどこでも転移できる。じゃあ、健闘を祈る」

それだけ言い残すとブリューナクは下って来た階段を上がって地上
に戻った。

「座標つて……………私、管理局の転送ポートの座標なんて知ら
ないわよ？」

「大丈夫だよ、お姉ちゃん。私はこれでも元管理局のエースなんだから」

笑顔でそう言うとアイリーンは転送装置の空間投影型キーボードを操作して座標を打ち込んだ。

「今はほとんど使われてない転送ポートに接続したから、いきなり襲われることはないと思う。」

「よし。じゃあ、行きましょう」

カームとアイリーンは転送装置の中に入った。アイリーンが装置の中からエネルギー源となる自分の魔力を注ぐと装置が稼働し始めた。そして、二人は青白い光に包みこまれて宿敵の本拠地に乗り込んだ。

青白い光が収まるとカームにはとても見覚えのない場所だが、アイリーンにはとても馴染みのある場所に無事転移した。転送装置があった地下のように規則正しい石で形作られた部屋ではなく、最小限の照明しか照らしていない薄暗い部屋。壁の材質も床の材質もまったく違う。

「ここが管理局？」

「うん。数多の次元世界を守りながら、自分は正義だと信じて非人道的なことを腐るほど行っている屑の組織だよ。」

（アイリーン、最近言葉が酷いよ？）

そんなアイリーンの顔は嫌悪感に満たされていた。

「早くレーヴァティンを回収しに行きましょう。アイリーン、案内は任せましたよ？」

「案内………する必要もないけどね」

カームの言葉にアイリーンはポツリとそんなことを漏らした。アイリーンの独り言は当然カームの耳にも届いていたが、カームは気にせず転送ポートが置いてあった部屋の扉を開けた。それと同時に眩い天井の照明の光が二人を照らした。

「こっち。」

アイリーンの案内に従って一本道を走るカーム。そして、目的の部屋にはあつという間に到着した。

「もう到着？」

「うん。あの転送ポートは元々緊急時にロストログアを持ち出すためのモノだから。」

そう言いながらアイリーンはロストログアを保管する部屋のセキュリティロックに手を掛けた。かつての自分の管理局員ナンバーを打ち込むが、やはりエラーと表示されてしまう。

「レイジングハート、ハッキングとかできない？」

《無理言わないでください。一番セキュリティが固い場所をハッキングできるわけないでしょ。》

「だよね」

アイリーンはため息を吐いた。

「お姉ちゃん、帰りはスリリング溢れる逃亡劇になるけど、それでもいい？」

「元々選択肢なんてないでしょ？ 思いっきりやっちゃいなさい」

カームは笑顔で義理の妹にゴーサインを出した。

アイリーンは背中に背負われた開闢の剣を抜刀すると保管庫の扉をバターのよじりに切り裂いた。

ウィーンッ！！ ウィーンッ！！ ウィーンッ！！

無理矢理セキュリティを突破したので侵入者を知らせるアラートが時空管理局本局内に鳴り響いた。

「アイリーン、急いでレーヴァティンを探すよ！！」

「うん!?!」

・

・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「あつた!?!」

「私の予想通りね」

レーヴァテインの搜索を開始してたった1分で目的のロストログイアは見つかった。
カームが世界を終わらせる剣のようなモノは一番厳重に守られている

ると考えて、その予想が見事にヒットした。

「これがレーヴァテイン。世界を終わらせる剣。確かにすごい魔力が籠められてるわね」

カームが見下ろす視線の先には太い封印効果を施された鎖に巻かれた一本の剣。

刀身は時間が立った血液のようにほんのり赤みが掛かった黒色。形状も特徴的で刀身の一部が突起して枝分かれしている。簡単に言えば、十字架の左右を少し曲げたような形だ。

そして、封印されている身でありながら開闢の剣にも劣らない魔力を放出している。

「えっと、取り合えず封印を解除しないといけないから……」

“戒めの鎖に刻まれし紋章よ 解け”

カームがレーヴァテインを封じ込めている鎖に触れると浮き出ている紋章が力を失って消滅した。

そして、カームはレーヴァテインの柄を握ると腕部に身体強化を集中させて鎖ごと一気に引っこ抜いた。

すると、レーヴァテインは産声を上げるように先ほどよりも密度の濃い魔力を放出した。

「お姉ちゃん、さっさと脱出するよ」

「うん。でも、どこから脱出するの？この部屋の入り口は塞がれているはずだろうし……」

「どうするの……」

アイリーンは保管室に突入した時と同様に開闢の剣で保管室の壁をバターのように切り裂いて、外の通路に出る穴を作り上げた。

「アイリーンも随分過激になったわね。」

「そう？記憶がある程度戻って高が外れたのかも」

「まあ、それよりも早くここから脱出しましょう」

「うん。」

カームとアイリーンは通路に躍り出た。

「いたぞ！！侵入者だ！！」

「邪魔」

通路に出た途端、後から駆けつけてきた武装管理局員の一団に見つかるが、アイリーンは歯牙にもかけず無関心に開關の剣を振るった。すると、突然巻き起こった暴風が管理局員の一団を吹き飛ばした。

「こつち!!」

アイリーンは保管庫の真正面 T字路を真っ直ぐ に向かって走り出した。

「追ってこられると面倒だから……」

カームはそう呟くとレヴァティンを振るった。
すると、二人の背後を塞ぐように炎の壁が出来上がり、追跡者の追跡を拒んだ。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

.....

.....

数分後、カームとアイリーンは追手を全てなぎ払いながら進み、脱出口の目前まで迫った。

「ここを突っ切れば、別の転送ポートがある。」

「そこにたどり着けば、ミッションコンプリートってわけか」

「そこまでや!!」

もう少しで転送ポートにたどり着きそうだった二人の前に立ちはだかったのは、背中に小さな六枚の黒い翼を生やして剣十字の杖を握った一人の少女だ。

普通の追手なら、容赦なく開闢の剣で意識を刈り取っていただろうが、アイリーンは開闢の剣を振るうのを戸惑った。

「時空管理局魔導騎士、八神 はやてや!!ロストロギア奪取及び公務執行妨害で逮捕する!!」

八神 はやてと名乗った少女は威風堂々とそう告げた。
すると、アイリーンは自分の素顔を隠していたカオスヘルムを脱いだ。

「その相手が私でもか？ “はやてちゃん”」

「えっ………？」

アイリーンは悪魔のような笑みを浮かべながら、素顔をあらわにした。
はやては信じられないような表情を浮かべながらもその手に握った杖を下ろすことはなかった。

「嘘………やる………」

「真実っていうのは時として残酷なんだよ？友人が敵にまわっただけで取り乱すようでは未熟だね」

「………偽物。そうや、偽物や！！本物のなのはちゃんがそんなことするわけあらへん！！」

明らかな現実逃避にアイリーンもカームも思わずため息を零した。

「真に戦う覚悟がないなら………眠ってなさい」

アイリーンははやてに肉薄すると開闢の剣の峰の部分ではやての腹部を思いっきり強打した。

はやては通路の壁に叩きつけられ、そのまま意識を失った。

「アイリーン、親友にも容赦ないね」

「戦場に出たら、どんな相手にも非情であれ。それが私の師匠の教えだからね。」

「はやてっ！ー！ー」

そんな会話を話してる内に敵側の増援が駆け付けてきた。

アイリーン（なのは）の知り合いが二人と武装した管理局員がおおよそ一個編隊。

「アイリーン、貴女が油売ってる隙に増援が到着したみたいだよ？」

「ちよっと計算外。」

アイリーンはカオスヘルムを再びかぶり直した。

「なのは……死んだって聞いてたから、生きてたのは嬉しいけど、どうしてこんなことするの!？」

「ある目的のためにこのロストロギアが必要だったから。それだけだよ。」

「本気なんだね？」

「そうだよ。さあ、目の前に居る犯罪者をどうするのかな？」

「止める。かつてなのはが私にそうしてくれたように」

金髪のような少女が持っていた斧のような形状のデバイスが変形し、魔力で形成された刃を持つ鎌になった。

「ふふふ 相手をしてあげたいけど、それはまた今度」

アイリーンは目の前の二人の気付かれないようにカームにアイコン

タクトをとった。

「レーヴァテイン!!」

そのアイコンタクトの意味を理解したカームは炎の壁で通路を塞いだ。

「いや〜ここまで遭遇率が高いと呪われてるんじゃないかと思うよ」

アイリーンは陽気にそんなことを呟いた。

「でも、どうするの？ 転移装置の所まで行けなくなつたよ？」

レーヴァテインが作り出した通路を塞ぐ炎の壁によって追手の追撃は止んでいるが、このままでは二人は管理局内から脱出できない。もし炎の壁を解除したなら、先ほどよりも多い数の追手に攻撃されることは間違いない。

四面楚歌 敵に囲まれているわけではないが 状態なアイリーンとカームは少し考え込んだ。

ちなみに、十字路の内残つた二つの通路は医務室に繋がる通路と時空航行艦が停泊している港だ。

「こつちだ!!」

「「え？」」

不意にカームとアイリーンの手が掴まれた。

第12話 思わぬ再会 IN管理局（後書き）

レーヴァテインが簡単に手に入りました。この段階でカームがレーヴァテインを完全に扱えるなら、一瞬で管理局を壊滅させることもできるんだけど、それは楽しくないので却下。

そして、アイリーンははやて、フェイトと再会（名前は出てないが、シグナムも）。

ここでアンケートです。

アイリーンサイドにアリサとすずかをドラグニティのような状態（つまりは竜に騎乗しながら戦う）で参戦させたいと思います。

竜の乗って戦うので武器は長槍か斬艦刀に限定されますが、二人が騎乗するドラゴンがまだ決まっています。

そこでこんなドラゴンに乗ってほしいというのを読者の皆様が募集します。

期限は来週まで。

RDDや氷結界の龍系統は除きます。DT版でもOCG版のどちらも可。

皆さん、ご協力お願いいたします。

第13話 脱出(前書き)

題名変えました。

第13話 脱出

第13話 「脱出」

簡単なあらすじ

ブリューナクのお願いで時空管理局の本拠地に煉獄の魔剣を回収しに来たカームとアイリオン。

セキユリティーを無理矢理ぶち破り、無事にレーヴァティンを奪取する。しかし、セキユリティーを無理矢理突破したために管理局員が追われることになる。

開闢の剣とレーヴァティンを駆使しながら脱出するために転送ポイントに向かう二人に八神 はやてが立ちはだかった。しかし、アイリオンは歯牙にもかけずはやてを撃退する。その後すぐにフェイトⅡⅡハラオウンとシグナムが現れる。カームがレーヴァティンで二人の進行を封じるが、同時にカームたちも逃亡ができなくなった。そんな時、カームとアイリオンの前に現れたのは……

「こつちだ!!」

「「えっ?」」

自ら逃げ道を塞いでしまったカームとアイリーンを導いたのは、一人の少年だった。

ガスタの一族が持つ緑色の毛髪にエメラルドのような色彩の瞳。二人を導いたのは間違いなく、ガスタ一族の少年だった。

「貴方………カムイね!!」

「そうです。管理局に潜入して色々と情報を流失させてたのですが………長より二人を連れて共に里に帰還しろっていう命が下つたんです」

二人を先導しながらガスタ一族の少年、カムイは答えた。

ウィンドールはいつか管理局に反旗を翻す時のためにカムイを密偵として管理局に放っていた。

さらに言えば、アイリーンの正体をウィンドールとカームが知って

いたのはカムイからもたらされた情報のおかげである。

(この子……どこかで見たことあるような……)

アイリーンの頭からカムイの既知感が離れないが、それを無理矢理振り払う。

「この先はドッグだよ。行ってどうするの？」

アイリーンが一直線に進む通路の先にあるのは次元航行艦の整備と補給等を行うドッグだ。
そこには転送ポートも存在するが、それは次元航行艦に転移するだけの簡易なモノである。

「大丈夫。すでに脱出の準備は整ってるさ」

「「？」」

カムイが用意していた脱出手段とは、整備が完了した次元航行艦一隻丸々だった。

本来、次元航行艦は サイズにも寄るが 10人程度で運用するのが普通で操舵を担当する者は特殊なライセンスが必要となる。しかし、搭乗人数はたった三人にも関わらずその次元航行艦は悠々と次元の海を何の問題もなく航行していた。

《艦内システム全てオールグリーン。航行にまったく支障ありません》

次元航行艦の艦内にかなり幼い少女のような音声が艦内アウンスシステムを通して艦内全域に響き渡る。

カムイたちが奪取した次元航行艦が少人数で問題なく航行している理由は、かなり高度なAIを搭載しているためである。

「次元航行艦にAIを積み込むなんて無茶するね」

アイリーンは呆れたように呟いた。

「大変だったさ。これだけ高性能なAIを作るのにもかなり時間がかかったし」

「だろうね」

次元航行艦のシステムを全て統括できるレベルのAIとなるともはやロストログイアクラスの演算能力やら、緊急停止システム等々色々積み込まなくてはいけない。それに艦長とのコミュニケーション能力も必要になってくる。

アイリーンが高町　なのはととして管理局に在籍していた時も次元航行艦に人工知能を搭載する計画は進められていたが、一向に進展しなかった。

「つか、無茶っていう点なら、あんたもどっこいどっこいだろっが。」

「今回だけだよ!!」

「ウソつけ!! 犯罪者の一味に真っ向から突っ込んでバカスカ砲撃撃つ奴が言っな!!」

「突っ込んで行ったんじゃないもん!! ちよつとOHANASHIしに行っただけだもん!! って、カムイと私っでどこかで会ったこ

とある？」

「ん？ああ。よくあなたの部隊に入れられてたからな。」

「……………」

アイリーンは腕を組んで記憶を遡る。

そして、アイリーンの頭に過ぎったのは誰よりも冷静で自分よりも頼りになる少し愛想が悪い緑髪の少年。魔力で劣る部分を技術で補う努力家だったのをアイリーンは鮮明に覚えている。

「思い出したよ。私の後ろをよく守ってくれてたのを」

「あなたは管理局でも特殊だからな。」

「特殊？」

カームとアイリーンの言葉が見事に重なる。

「管理局は高ランク魔導師に洗脳を施しているんだ。あなたの元親友も例外じゃない」

「「!!」」

ちなみに、アイリーン（なのは）に洗脳が施されていなかったのはアイリーンの性格的に親友が管理局に所属している限りアイリーン（なのは）は管理局を裏切ることはないだろうと管理局の上層部が高を括っていたからだ。

「管理局はもう真っ黒だ。つまり、全ての管理局員が敵に回ることになる。」

それを聞いてもなお、あなたは管理局と敵対するのか？」

「カムイ、私は一度言ったことを曲げたことがあった？」

アイリーンは強気な頬笑みを浮かべながらそう言った。

「フツ、そうだったな」

《マイスター、もうすぐで目的地に到着します》

「わかった。僕はウィンダール様のところに行かないといけないから、ここで一旦解散だ」

「うん。」「ええ。」

カームとアイリーンは奪取した次元航行艦に搭載されている転送ポ
ートに向かった。

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

転移が終了すると同時に少しの間だけ感じて居なかった冷気が再び
二人に襲いかかった。

そして、アイリーンが慌てて耐寒結界を最大で展開するように命じ
ると寒さがかなり和らいだ。

「あゝ凍死するかと思っただけ」

「冗談に聞こえないから怖いね。」

アイリーンとカームは少し冷や汗を流した。

「さてと………ブリューナクたちを探してレーヴァティンを渡さない」と

「でも………どうやって探す？」

“歩みを止めた世界”はかなり広い。地球で言うなら、アフリカ大陸と同じくらいの面積だ。

そして、こっちの人手はたったの二人だけ（正確には二人と一機）。正直、徒労に終わるのが目に見えている。

「適当に歩きまわってたら見つかると思う。」

その必要はない

「……！」

カームとアイリーンの背後にはいつの間にかドラゴン形態のトリシユーラと同じぐらいのサイズのドラゴンが威風堂々と座っていた。トリシユーラと違い、四本の足でその巨体を支えて首の数は一つ。しかし、翼はトリシユーラよりも大きい。

我は氷結界第2の竜グングニル。ブリユーナクの頼みでお主らを迎えに来た

「迎え？」

左様。付いて来い

グングニルは起き上がり、四本の足で歩いて行く。そして、カームとアイリーンがグングニルの後ろを追いかけるように歩く。少し歩いてたどり着いたのは、カームとアイリーンが最初にトリシユーラと遭遇した儀式の祭壇の前だった。しかし、ブリユーナクとトリシユーラの姿は見えない。

む。あの二人、何処に行ったのだ

どつちからどこで待ち合わせる予定だったらしい。

すまない。お主らを迎えに行っている間に二人がどこかに行ってしまったようだ。大体の予想が付くが……………。

「「？」」

グングニルの言葉にカームとアイリーンは首を傾げた。

「おう。もう帰ってたのか」

噂をすれば影のことわざのように人型のブリユーナクは現れた。

・ 肩に養巻きにされたトリシューラ（人型）を担ぎながら……………

「……………」

カームとアイリーンは敢えて何も言わなかった。

「ブリユーナク、約束通りレーヴァティンを取って来たわよ」

「思ったより早かったな。まあ、別にいいけどよ」

ブリューナクが手を翳すとカームの右手に握られたレーヴァテインのコアから水色の球体が飛び出してブリューナクの身体に吸い込まれていった。その時、ブリューナクはニヤリと笑った。

「お前らが奪い取ったあたいの力、返してもらったぜ」

ブリューナクの魔力がつい先ほどよりも格段に上がっていた。レーヴァテインを奪い去った管理局はそれを追撃しに来たブリューナクと交戦。しかし、ブリューナクはレーヴァテインによって氷結界の龍としても力をずっと奪われていたのだ。

「さてと。あたいの力が戻ったことだし、このバカ兄貴のせいで凍りついたこの世界を元に戻すか。」

「どうすればいいの?」

「簡単さ。祭壇にある儀水鏡をレーヴァテインで突き刺せばいい。」

「わかった。」

カームは祭壇の前に立ち、儀水鏡めがけてレーヴァテインを突き刺した。

儀水鏡を守るように覆っていた分厚い氷はバターのようにつき抜け、

レーヴァテインの刀身が儀水鏡を貫いた。それと同時にレーヴァテインの焔が“歩みを止めた世界”を駆け巡り、時間を止めていた氷を昇華させた。

「さあ、今日は宴だよー！」

・

・

・

・

・

その日の夜、元“歩みを止めた世界”の中心では盛大な宴が行われた。

他の種族の長たちも管理局打倒に一時休戦し、アイリーンたちに協力してくれることになった。

当然、カームとアイリーンもその宴に参加（ブリューナクによる強制）していた。

「さあ、飲め飲め 今日ほめでたい日だ」

ブリューナクは完全に酔っぱらっていた。それに同調しているんな種族たちが自前の酒を飲み干す。

そして、カームやアイリーンも注がれたワインを飲み干す。

この宴会は明け方まで続けられることになるが、アルコールのせいで判断能力が鈍っていたのかトリシューラが悪い笑みを浮かべていることに二人は気付かなかった。

第13話 脱出（後書き）

アンケートは本日で締め切りとなりました。アンケートに協力してくださった読者の皆様には心の底から感謝の念を申し上げさせていただきます。

そして、アンケートの結果ですが、回答が予想以上に分かれたので私の独断で選ばさせていただきました。

アリサ・・・タイラントドラゴン

すずか・・・真紅眼の闇竜

サポート・・・ベビー・ドラゴン（エクシーズ）

という感じになりました。ベビー・ドラゴンはユーノ的なポジションです。ちなみに、性別は雌。

第14話 トリシューラのたくらみ。そして、舞台は地球へ

第14話 「トリシューラのたくらみ。そして、舞台は地球へ」

簡単なあらすじ

トリシューラの氷を溶かす為に煉獄の魔剣を求めて管理局に侵入したカームとアイリーン。

目的のロストロギアを無事に奪取した二人は管理局に潜り込んでいたカムの助けで管理局を脱出。

秘密裏に開発されていた人工知能を搭載した次元航行艦に乗り、
“歩みを止めた世界”にたどり着いた。レーヴァテインの炎によって
再び時の歩みを再開した世界。

それを祝って、宴会が開かれたが………

「うっっ頭が痛い」

「飲み過ぎるからだよ」

宴会の最中にカームが酔いつぶれてしまったので、カームとアイリオンはミストバレー地方（元“歩みを止めた世界”）で一夜を明けることになった。

そして、カームはあてがわれた部屋の中で二日酔いと格闘していた。

「だって、次々に注いでくるんだもん……。ううう頭が」

「そのまま置いておけばよかったのに」

カームはワインを薦められるままに飲み干していた。結構な量のワインを飲んでいたので二日酔いになるのは当然のことだ。

ちなみに、アイリオンは最初はカームと同じペースで飲んでしたが、途中からアルコール度数の低いチューハイを選択したり、注がれたワインをわざと残したりして翌日に響かないように調節していた。

「うううアイリオン、水」

「まったく……」

アイリーンは呆れたようにため息を吐いた。その時、カームの右手の甲に刻まれた刺繍に気が付いた。赤い絵の具でドラゴンの翼を模したような文様を描いたような刺繍。それがカームの右手の甲に刻まれていた。

「お姉ちゃん、その手の刺繍どうしたの？」

「ん〜・・・よくわかんない。アイリーンにも同じ刺繍があるよ〜」

「えっ？」

カームに指摘されてアイリーンも自分の右手の甲を見た。アイリーンの右手の甲にもカームとまったく同じ赤い赤い文様が刻まれていた。

「なんだろ？」

「さあ？それよりもアイリーン。水ちようだい」

「はいはい。」

「その必要はない」

部屋の出入り口で水の入ったコップを持ってきてくれたブリューナクが立っていた。

「あの飲みっぷりなら、多分こうなってる思ったが、予想通りだな。」

「すみません、ブリューナク。」

アイリーンはお礼を言って水の入ったコップを受け取った。その時、目ざといブリューナクはアイリーの右手の甲に刻まれた文様に気が付いた。

「あなた、その手の甲の文様は？」

「わかりません。朝起きたら刻まれていて……」

「ごめん、あたいは用事があるんだった。」

ブリューナクはそう言い残すと部屋を出た瞬間、どこかに猛スピードで向かっていった。

しばらくすると通路の方から「このクソ兄貴!!」という罵声と妹に許しを乞う惨めな声が聞こえてきたのは言うまでもない。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・

「「すいませんでした!!!」」

数分後、ブリューナクと氷結界の舞姫がカームとアイリーンの部屋に戻ってきた。

そして、戻ってくるなり土下座して二人に何かを謝罪した。しかし、何に対して謝罪しているのかわからない二人は目を白黒させていた。

「実は昨日の宴会で二人が飲んだワインには、内のバカ兄貴の血液が混入されていました。」

我々龍種の血の生命力は他の種族を圧倒するほどです。」

「えっと……どういうこと?」

二日酔いからある程度復活したカームが尋ねる。

「単刀直入に言いますと……お二人は半人半龍の不老長寿になりました」

氷結界の舞姫が事実を告げた。

「えっと……マジ?」

「マジです。」

「ほんっつとつにすいません!」

再びブリューナクは土下座した。

「まあ、なっちゃったものはしょうがない。普通の人よりちょっと長生きできるって思えばいい。」

意外と楽観主義なカーム。

「同感。」

それに賛同するアイリーン。

「そうそう。お姉ちゃん、私しばらくこの世界を離れるよ」

「どっへん？」

「確かめたいことがあるから。だから、一度故郷に帰るよ。」

もうひとつの故郷、第97管理外世界に。」

〔第97管理外世界 地球〕

極東地日本海鳴市。

大きなビルが軒並み建つ繁華街。日が落ち、月が顔を見せている時間にビルの屋上では二人の少女が誰かを待っていた。

ガチャッ

音を立ててビルの屋上の扉が開かれる。

扉から入って来たのは、赤い髪を2本に三つ編みで編んだ一人の少女だった。

「わりい。はやてを誤魔化すのに時間がかかった。」

「別にいいわよ、ヴィータ。それよりも大事な話って何よ」

金髪の少女がヴィータと呼ばれた幼女に話しかける。

「つい先日、管理局に泥棒が入りこんだ。そして、その泥棒がなのはだった。」

「「!!」」

金髪の少女と紫っぽい髪色の少女は驚いた。そして、笑みを浮かべた。

「やっぱり生きてんだ、なのは」

「まあ、元々空間の裂け目に呑みこまれただけだし。」

「どうやらなのはの奴、裏でこそこそと動いてるようだ。」

それともうひとつ。また管理局でドラグニティ討伐隊が編成されている。」

「また？あいつらも懲りないわね」

「仕方ないよ。向こうは自分たちが正義でそれ以外が悪なんだから」

「それもそうね。まあ、私たちには何度やっても勝てないけどね」

金髪の少女、アリサーバニングスの右手にはいつの間にか一枚のカードが挟まれていた。

そのカードには英語で“タイラントドラゴン”という名称とドラゴンの絵柄が描かれていた。

「そうだね。私たち“ツインドラグニティ”には」

紫っぽい髪色の少女、月村　すずかの左手にも一枚のカードが挟まれていた。

そのカードには英語で“真紅眼の閻竜”と書かれており、中央には閻色の鱗を持つワイバーン型のドラゴンが描かれていた。

反管理局グループ“ツインドラグニティ”

現在、管理局が血眼になって討伐しようとしている反管理局グループ。グループ名の通り二人の人間がドラゴンに跨って戦う。その正体はアイリーンの親友であるアリサとすずかの二人。管理局は一方的に二人を異端者と決めつけて、度々部隊を送るが、全て殺害されるか、重傷を負っている。

「でも、ありがとな。あたしの言葉を信じてくれて」

「何言ってるのよ。ヴィータは嘘言ってるんだから信じるのは当たり前じゃない」

アリサは笑顔でウィンクした。

実は、アイリーンがワームホールのを見たヴィータはアイリーン（なのは）が生きていると確信していた。しかし、上層部がアイリーン（なのは）の捜査を強制的に打ち切った。

そして、1年の月日が流れてもアイリーン（なのは）の手掛かりが見つからなかったのでヴィータを除く全員がアイリーン（なのは）は死んだと思っている。

「でも、管理局と敵対しようとしているってことは………なのはちゃんも裏を知ったのかな？」

「さあね。それは本人に聞いてみないとわかんないわ。私たちはこの子のおかげで知ったけど」

いつの間にかアリサの肩にはマスコットののような可愛らしい小さなドラゴンがちょこんと座っていた。

そのドラゴンの名前は「ベビードラゴン」。自分の力をアリサとすずかの二人に与えた竜だ。

「それよりも討伐部隊の到着はいつぐらいになるの？」

口を開いたのはアリサの肩に座ったままのベビードラゴン。ベビードラゴンは若齡龍だが、人語を理解し、人語を話すことができる。（普通はトリシューラののような長年生きた竜しか人語を喋れない）

「正確な日程はわかんねえ。けど、部隊が整い次第討伐に来ると思う。まあ、集まりが悪いから結構後にあると思う」

「当然ね」

アリサとすずかには、多額の懸賞金がかけられており、それを目当てに討伐隊に志願する者も少なくは無い。しかし、一度も無傷で帰って来た者は一人も居ない相手に運悪ければ死んでしまうかもしれない戦場に出てくる勇敢な人材は管理局にはほとんど居ない。ちなみに、アリサとすずかは相手を殺すことを躊躇いもしない。向こうが殺す気で襲いかかってくる限り、二人はそれ相応の報いを相手に与える。

「急いで報告することはそれぐらいだ。じゃあ、あたしは帰る。」

「ええ。スパイ活動御苦労さま」

その後、三人は夜の闇にまぎれて姿を消した。

第14話 トリシューラのたくらみ。そして、舞台は地球へ（後書き）

今回よりストーリーの舞台が一時的に地球に移ります。

第15話 逃亡者

第15話 逃亡者

〔日本海鳴市某所〕

早朝。小高い丘の上では二人の少女が槍と振るい、刀を振るっていた。

カンッ！！カンッ！！カンッ！！

甲高い金属が連続で鳴り響く。
下手をして防御をミスったりすれば、大けがをしてもおかしくはない訓練を二人は続けていた。

槍を巧みに動かして刀の猛攻を完全に防ぎきる紫っぽい髪色の少女。対するは日本刀を振るい、果敢に攻め立てる金髪の少女。

ヒュン

風を切る音が聞こえる。

一瞬の隙を的確に突いて槍を振るう少女が自身の持つ槍は真っ直ぐ突きだしたのだ。

刀を振るう少女の顔面に向けて放たれた攻撃は顔を横に曲げることで回避していた。

二人は笑みを浮かべた。

「今殺す気で攻撃してきたでしょ？」

「うん。アリサちゃんなら、避けられると思って」

「大した信頼、ね!!」

真下からの切り上げ攻撃。相手を本気で切り裂こうとして放たれた一撃は虚空を切った。

「危ないな」。咄嗟に後ろに下がらなかつたら、服が血で染まるところだったよ」

普通の人が見ていたなら、この光景を訓練とは言わないだろう。手加減しているとはいえ、二人が行っているのは殺し合いに他ならない。しかし、二人はお互いの実力を信頼しているので怪我を負うことはない。

「初めの頃は戸惑ったけど、慣れると普通にできるものね」

金髪の少女は刀を腰に差していた鞘に戻した。紫っぽい髪色の少女も槍を背中に背負う。

金髪で刀を振るっていた少女の名前はアリサ＝バニングス。

紫っぽい髪で槍を振るっていた少女の名前は月村　すずか。

二人とも、元々は普通の一般人でアイリーン（なのは）の親友だった。

しかし、数ヶ月前にベビー・ドラゴンというアトランティカ（アイリーンたちが居る次元世界）出身のドラゴンより受け取った特別な力で龍騎士ドラグニティとなった。

この二人がたった数カ月でメキメキと力を付けたのは、ベビー・

ドラゴンが提案した可能な限り実戦に近づけた訓練と二人の潜在的な才能のおかげである。

「さてと。そろそろ学校に行かないと間に合わなくなるわね」

アリサはポケットから懐中時計を取り出して時間を確認する。時刻はちょうど7:00。

アリサとすずかは高校生だ。しかも、少し遠い私立の高校に通っているのでそろそろ通わないと絶対に学校に間に合わない。

「じゃあ、結界を解除するよ」

二人の前にぬいぐるみのように愛らしいドラゴンが現れた。

そのドラゴンこそアトランティカからの来訪者であり、アリサとすずかに力を与えたベビー・ドラゴンである。ちなみに、結界システムの魔法も使える。

ベビー・ドラゴンが人払い結界を解除すると高台に人氣が戻ってきた。それと同時にベビー・ドラゴンも何処かに姿を隠した。

「じゃあ、行こうか」

「うん。でも、その前に……」

「？」

「ケータイ鳴ってるよ」

「もう誰よ」

アリサは制服のポケットから音楽を鳴らしているケータイを取り出して回線を繋げた。

「よつやく出やがったな」

「ヴィータ？こんな朝っぱらから何の用よ？」

「ロストロギアを奪った犯罪者が地球に向かった。」

「へえ……………」

電話越しのヴィータのセリフにアリサは唇をニヤリと三日月型に歪ませた。

「そのロストロギアを奪えばいいのね」

「ああ。このまま管理局にあっても碌なことはないからな」

「了解了解。」

そう返答するとアリサは回線を切断した。

「さすが、今日の学校はお休みだわ」

「次元犯罪者？」

「多分ね。というわけで今日は学校休むわよ」

「わかった。お姉ちゃんに頼んで学校の方に連絡を入れておいてもらうよ。」

「ええ。さてと………犯罪者が転移した場所は？」

アリサのケータイの画面には一通の電子メール画面が表示されていた。送り主はヴィータ。
ヴィータのメールには、犯罪者が転移したと考えられる大まかな場

所が記されていた。

「海鳴の沿岸部ね。」

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

・

海鳴市沿岸部。貿易のために整えられた港と貿易品を納めるための倉庫しかないその場所に布に巻かれた何かを大事そうに抱えている女性が居た。
その女性は追手から逃げるように周囲をキョロキョロと警戒していた。

「管理局の追手は……まだ来ていないか」

女性はひとまず安堵のため息を漏らす。黒い服を着ている彼女だが、その腹部はより黒く染まっていた。彼女は管理局の追手から逃げる際に腹部を撃ち抜かれた。非殺傷設定ではなく、殺傷設定の魔力弾で。

「私の命も……それほど長くないわね」

女性は自分をあざ笑うように笑みを浮かべた。

彼女は自分の死が間近に迫っていることを本能的に理解していた。

しかし、女性は死ぬわけにはいかない。まだ果たせていない使命があるのだから。

「くっ……この“剣”を、誰か信頼できる人物に渡さなければ」

管理局は女性の一族に伝わる神剣を求めて交渉してきた。しかし、一族の当主はそれを拒絶。

当然だろう。一族に代々伝わる神剣を何の理由もなしに「引き渡せ」と言われて引き渡す者は何処にも居ない。

そして、管理局は一族を根絶やしにして神剣を奪おうとした。女性はその一族の生き残りで当主よりその神剣を自分の信頼できる者に渡せという使命を受けた。

故に、女性はここで死ぬことを許されない。何より自分のプライドが許さない。

「この身体では移動は無理か……。ならば、この神剣を管理局の手の届かない場所に……………」

女性はほとんど動かない身体を引きずって海に向かった。

いくら管理局でも海底深くにある神剣を回収することはできないだろう、と考えた女性はその神剣と共に海に身を投げ出そうとした。

(すみません、父さん。任された使命を果たすことができなくて……………)

ガシッ!!

「勝手に自殺しようとしてんじゃないわよ」

水面まであと1cmというところで女性の身体は止まった。

そして、物凄い力で女性の身体が力いっぱい引き上げられる。

「まったく……………私が此処に居なかつたら、死んでたわよ」

女性を助け出したのは、白い半そでのチャイナ服のような衣装に黒い腰巻とマントを付けた戦闘服を身にまとったアリサだった。

「貴女、は……………」

「私はアリサ。とある事情で管理局と敵対する者よ」

「まさか、“ツインドラグニティ”！？」

「へえ……………。私たちのグループ名も結構有名になったものね」

アリサは知らないが、目の前の女性がいくつもある辺境世界の中でも地球を選んだのは、ツインドラグニティが活動拠点としている世界であるからだ。

彼女の実家は管理局を絶対正義を思っていない珍しい家系だった。その家系の目先のことを鵜呑みにせず、客観的に物事を捉えることを始祖からの教えとしていた。ゆえに、管理局から狙われたのだ。

「貴女がツインドラグニティの一人なら、助けてください！！」

女性の懇願にアリサは……………

「当たり前前よ。助けるつもりがなかったら、自殺を止めようとな
いわよ」

そう即答した。

その時、アリサと女性は複数の転移魔法の反応を鋭敏に感じ取った。

「アリサちゃん!!」

バサツ!!バサツ!!とカブよく翼を羽ばたかせる音と共に現れた
のは、レッドアイズ・ダークネスドラゴン真紅眼の闇竜に跨ったツインドラグニティの片割れである月
村 すすかだった。

薄い青色の軽装の鎧をその華奢な身体に身につけて、素顔を隠すた
めに黒いバイザーを装着している。

女性はすすかが従えるドラゴンに啞然としていた。

「どうしたの、すすか。って聞くまでもないわね。すすかはこの人
を連れて行って。」

あいつらは………私一人で相手するわ」

「わかった。」

女性は心配そうな表情を浮かべるが、すすかはアリサを止めるよう
な野暮なことはしない。

何よりアリサの実力は相棒であるすすかがよく知っている。

「じゃあ、気を付けてね」

すずかは女性を乗せると手綱を操って夜の闇に消えていった。

「さてと。私も行くとしましょうか」

アリサは黒い仮面を装着して口元だけを露出させる。
そして、一枚のカードを召喚して宣言する。

「招来せよ、タイラントドラゴン!!」

グオオオオオツツツ!!!!!!

巨大なドラゴンが海鳴市に降臨し、雄たけびを上げる。
アリサはタイラントドラゴンの背中に飛び乗って手綱を握る。そして、右手に巨大な斬艦刀が顕現する。

「見つかったかっ!？」

「こっちには居ません!！」

すずかとアリサに保護された女性を必死に管理局の隊員が探し回っていた。

搜索に当たっている管理局員の表情には焦りの色が見える。

「くそっ!!--早くしないとツインドラグニティが来ちゃう!!--」

管理局員が恐れていたのは、この土地を根城にしているツインドラグニティの襲撃である。

彼らのような一階の魔導師では、瞬殺されるのが関の山だ。

「おやおや。誰を探してるのかな？」

搜索地点に響く女性の声。それを聞いた瞬間、管理局員たちは震え上がった。

そして、管理局員の予想を裏付けるように大きな羽音が港の倉庫地帯に響き渡る。

「つ、ツインドラグニティの一人」

「「巨龍の馭り手」!?!」

管理局員たちの前に絶望の福音を鳴らす龍騎士がさっそうと現れた。
さあ、彼らの運命は!?!

第15話 逃亡者（後書き）

新しいキャラクターの登場です。このキャラクターはとある作品のヒロインと同じ力を持っています。（ヒント：現在放送中（10/26現在）のアニメです。）

第16話 無法者に裁きを

第16話 無法者には裁きを

簡単なあらすじ

管理局に追われていた女性は最後の希望に縋って地球にやって来た。しかし、追手の手は止まず、女性は父より託された神剣と共に海に飛び込もうとした。しかし、間一髪ツインドラグニティの一人、“巨龍の駆り手”アリサーバニングスに保護される。その刹那、女性が持つ神剣を追って管理局が地球に襲来した。アリサは単身管理局の軍勢に向かっていく。

「殺されたくないなら、逃げなさい。逃げる者を追うような無粋な真似はしないわ」

管理局に名を轟かせる“巨龍の駆り手”の登場に神剣を回収しようと地球に襲来した魔導師たちは完全に震え上がっていた。あまりの恐怖に腰が砕けて尻もちをついている管理局員も居る。

「10秒だけ待って上げるわ。引き返すなら、殺さない。」

アリサの最後通達に恐怖に打ち負かされた管理局員は次々に逃げ惑う。

10秒後にその場に残っているのは、命知らずの猛者と懸賞金目当ての魔導師の総勢5名だけだった。

「この場に残ってるってことは死ぬ覚悟はできてるわけね？」

「はっ。お前には多額の懸賞金が掛かっているからな。お前を殺すなり捕えるなりすれば、一生遊んで暮らせるんだ!!」

合図なしの奇襲。自信満々に襲いかかって来た魔導師は一撃でアリサに止めをさすつもりだ。

しかし、アリサは10人の魔導師を同時に相手にして無傷で勝利す

るほどの実力を持っている。その程度の奇襲でどうにかなるわけがない。

「ふっ……」

アリサは笑みをこぼして右腰の日本刀を引き抜いた。

「死に曝せえ!!!」

アリサに襲いかかるのは、30を超える殺傷設定の魔力弾による弾幕攻撃。

アリサはさらに左腰の日本刀を引き抜き、タイラントドラゴンの背中から飛び出して死地に突っ込んでいく。

「紅魔剣 弐の太刀」

ザシュツ!!ザシュツ!!

紅蓮の炎を纏った2本の刀による斬撃。振るい、飛び散った炎が弾幕を焼き尽くしていく。

あり得ない光景にその魔導師は言葉を失った。

アリサが振るう2本の剣、《紅魔剣》が放つ炎は普通の炎ではない。《紅魔剣》の炎は魔力を喰らい、魔力を喰らい尽くすまで消えることとはなく、魔力を喰らうほど勢いが増す特殊な炎である。

「私のこの刀に……」

「ぶ、プロテクション！」

魔導師は咄嗟に障壁を張るが、アリサの《紅魔剣》は障壁を紙切れのように切り裂き、魔導師の肉体を真っ二つに切り裂いた。

「切れぬものなどあんまりない」

先陣を切った魔導師が真っ二つに切り裂かれる光景を目撃した面々の顔は真っ青になっていた。

アリサが殺意の籠った視線を送ると残りの9人は次々に逃げ出した。

「まったく。腰ぬけばっかりね」

そう言いながらアリサは《紅魔剣》を鞘に納めた。

「さてと………さてと戻りましょうか」

ギャオオオン!!

アリサが再びタイラントドラゴンの背中に乗つかるとタイラントドラゴンが昇った夜空に向かって羽ばたいた。

一方、月村の屋敷では………

「はい。治療終わり」

「あ、ありがとう………。」

管理局の追手をアリサに任せて一足先に屋敷に戻ってきた。
この屋敷に住んでいるのは、すずかとその専属メイドであるフェアリン。すずかの姉、忍と忍の専属メイドのノエルは恋人である恭也と共にドイツに行っているの、日本には居ない。
故に、アリサとすずかの二人の活動拠点になっている。

「そういえば、自己紹介がまだだったね。私はツインドラゲニティ
“闇竜の駆り手”月村 すずか。」

「私の名前はエリス。サントメール家の末裔、エリス＝サントメールです。」

「そして、その包みが神剣？」

「はい。」

エリスはずつと黄土色の布に巻かれた剣をすずかに見せた。
神剣の正体は飾り気のない無骨な大太刀だった。切ることのみを追究したその大太刀は蛍光灯の光を反射して妖しく輝いていた。

「サントメール家に伝わる大太刀、“にえとのしやな贄殿遮那”です。」

「・・・・・・・・」

すずかは警殿遮那をまじまじと見つめる。

(この刀・・・・・・・・この世で作られたものじゃない。)

確信はない。しかし、すずかは本能的にこの刀がこの世で作られたモノではないということを感じ取っていた。

「この刀はサントメール家の開祖が持ちこんだモノです。私たちサントメール家の女性は代々不思議な力を受け継いで来ました」

214

その言葉の刹那、エリスの漆黒の髪と瞳が燃えるような炎の炎髪と灼眼に変わる。
突然の豹変にたくさんの非日常と関わって来たすずかも驚きを隠せなかった。

「これが始祖より受け継いだ“炎髪灼眼”の力です。この力が管理局に狙われた原因でもあります」

「どっして?」

「この姿は魔力と異なる力を使います。私自身、どのような力なのかわかりませんが……」

（なるほど。魔力至上主義の管理局じゃあ、目をつけられるのは当然か）

力を解除したエリスの髪と瞳が元の漆黒に戻る。

「それで。貴女はこれからどうするの？」

「……」

「貴女の選択肢は二つ。管理局の追手から逃げ惑うか、私たちと同盟を結んで共に管理局を倒すか」

「後者の方で」

「返答早っ!!」

「私は管理局を倒したくてつづつづしてますから」

エリスはニヤニヤと笑みを浮かべた。
「どうやらエリスは血気盛んな性格らしい。」

「まあいいや。これからよろしく、エリス。」

「はい。そういえば、もう一人は大丈夫なんですか？私の追手は結構な数だと思いますが……」

「そろそろ帰ってくると思うよ？魔法に頼り切った魔導師にとってアリサちゃんの刀は天敵だから」

「すずか様。アリサさんがお帰りになりました」

「ありがとう、ファリン。通してあげて」

「わかりました」

しばらくするとアリサが扉を開けて入って来た。

「ただいま」

「おかえり〜」

さすがの部屋に招かれたアリサは円卓の椅子に腰かける。

「あれだけの数の魔導師によく勝てましたね」

「あつけないモノよ？私の正体を知った途端に半数以上は逃げ出して残った命知らずの一人をこっちの力を見せつけて勝ったら、全員に逃げ出しわ。」

「納得です。今の魔導師は本物の殺し合いを経験したことがありますから。」

人を殺したことに何も言わないエリス。

エリスの実家のサントメール家は殺し合いを想定した真剣を用いた稽古を行っていた。

エリス自身人を殺したことはないが、とある事情で人が死ぬのに慣れてしまっている。

故に、エリスは何も言わない。

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。私はアリサ・バニングス。管理局だと“巨龍の駆り手”って呼ばれてるわ」

「エリス」サントメールです。助けていただいております。ありがとうございます」

エリスはアリサに対して頭を下げた。

「気にしなくてもいいわよ。」

「アリサちゃん、紅茶だよ」

「ん、ありがとう」

「エリスさんもどうぞ」

「いただきます」

アリサとエリスはすずかからミルクティーを受け取り、口に運ぶ。すずかもアリサの向かい側の椅子に腰かけて自分もミルクティーを飲む。

「美味しいですー!!」

「ふふ ありがとう」

しばらくの間三人による夜のお茶会が続けられた。

・

・

・

・

・

「ふと思ったけど、エリスって何歳？私たちがため口で喋ってるけど
すっかり仲良しになったアリサが不意にエリスに対してそんな質問
を投げかけた。」

「14歳ですよ？」

「……………へ？」

「すずかとアリサはそろって素っ頓狂な声を上げた。

エリスの姿は20歳前後の若く美しい女性の姿だ。何処からどう見てもアリサたちと同じ14歳には見えない。

「そういえば、言ってませんでした。私のこの姿は魔力で編まれた仮初の姿なんです。」

「そう言ってエリスは自分に掛けていた変身魔法を解除した。

髪や瞳の色はそのままだが、身長は女子の平均よりも少し高いくらいまで縮み、それに合わせて足の長さや腕の長さも変わった。

「ふ……………訓練とかする時は基本的に成長した姿なのでたまに忘れてしまつんですよね」

「変身魔法って……………使ってる気配がまったくなかったわよ」

「アリサとすずかは感心した。

「当然、二人も変身魔法を使えるが、エリスの場合は変身魔法を使っている気配がない。

「普通の魔導師なら、魔法を行使している以上魔力が外部に漏れ出すので変身魔法を使っていることが割と簡単に判明する。」

しかし、エリスにはその魔法行使の気配がなかった。

「サントメール家に伝わる“自在法”と言われるモノで魔力の痕跡を隠してますから。」

自在法の心得が無い者には見破られることはありません。」

「ふうん……ミッドチルダにそんなモノがあるんだ」

「はい。私の始祖はその自在法を自在に操り、古代ベルカの戦場を駆け回ったと言われています。」

始祖の女性の方は“炎髪灼眼の討ち手”、始祖の男性の方は“祭礼の蛇”と名乗っていたそうです。」

そんな会話をしながら夜は更けていった。

二人に協力することになったエリスはさすがの屋敷で寝泊まりすることになった。

第16話 無法者に裁きを（後書き）

新キャラ、エリスの素性がいろいろ明かされました。

エリスの能力等は後々付けくわえたモノなので、若干矛盾が生じるかも？

ちなみに、エリスは剣術の腕はシャナ以下で自在法の腕前はシャナ以上という力量の持ち主です。

第17話 炎髪灼眼の討ち手（前書き）

サブタイトルはつっこまないでください。

第17話 炎髪灼眼の討ち手

第17話 「炎髪灼眼の討ち手」

前回のあらすじ

ミッドチルダに存在するサントメール家の末裔、エリスはサントメールは家宝である神剣“贄殿遮那”と共に第97管理外世界地球の海鳴市にたどり着いた。幸いにもツインドラグニティと合流することができ、エリスはその庇護下に入る。

その直後、エリスを追ってきた管理局の魔導師たちが現れるが、アリサの登場とその実力を目の当たりにした魔導師たちは逃げ出した。そして、エリスはツインドラグニティの二人と言葉を交える内に仲良くなった。

エリスとアリサ・すずかの二人が同盟を結んでから大体3日が過ぎた。

管理局もツインドラグニティの庇護下に入ったエリスを無暗に追いかけることはできず、しばらく平和な日々が続いていた。

追手によって負わされたエリスの怪我も完全に完治して、エリスも二人も訓練にしばしば参加するようになった。

そんなエリスはある日海鳴の街を一人散歩していた。

「うーん……ここは長閑で気持ちがいい」

ぐぐつと身体を伸ばすエリス。

エリスが居るのは、海が一望できる海鳴臨海公園。この場所ではかつて二つのロストログアの巡る争いが繰り広げられたが、エリスはそんなこと知らない。

「今日はどうしようかな？アリサもすずかも学校で屋敷には居ないし」

現在の時刻は大体1:00を回った頃。アリサやすずかが返ってくるまでまだまだ時間がある。

ちなみに、エリスは街に行くに当たってある程度のお金をすずから支給されている。

することもなく、ただただ海を眺めるエリス。

「ん、良い匂い………」

公園のベンチで海を眺めていたエリスの鼻が香ばしい香りを嗅ぎ取った。

「あっ
」

その香りの出所を見つけたエリスは猫のように瞳をらんらんと輝かせた。

エリスが嗅ぎ取った香りの出所はワゴン車で移動販売を行っているメロンパンのお店だった。

「すずかに無駄使いはしないように言われてるけど………メロンパン一個ぐらいなら大丈夫だよな」

そう言って自分を納得させるとエリスはふらふらとメロンパンのお店に近づいて行った。

「おばさん、メロンパンください!」

「はいよ。今なら、500円で二個買えるけどどつする?」

「うーんと……」

メロンパン一個300円なので100円ほどお得だ。財布にきちんと500円分のお金も入っている。

「じゃあ、二つ」

「あいよ。それにしてもお嬢ちゃん、運がいいよ。今焼き立てなんだよ」

「ほんと!?!」

「ああ。はい、メロンパン2個。」

「ありがとう」

エリスは500円玉と引き換えにメロンパンが入った袋を受け取るとベンチに戻った。

ちなみに、ミッドチルダ人のエリスが普通に現地民と会話できるのは、サントメール家特有の自在法と言うモノのおかげである。

「はむ
」

紙袋からメロンパンを一個取り出してそのままかぶりつくエリス。

「うーん このもふもふ感とカリカリ感がたまらない
」

エリスはがつがつとメロンパンをむさぼる。

エリスもだが、何故かサントメール家の女兒はメロンパンを好く傾向がある。個人によつてばらばらだが、好物にメロンパンを第1に挙げるのがサントメール家の女兒とつては普通になっている。

ちなみに、これには始祖が深く深く関わっているのは言うまでもない。

「はむ
」

エリスの至福の時間はしばらく続いた。

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

.....

.....

数分後。一個目のメロンパンを食べ終えたエリスは至福の時間がさめない内に2個目のメロンパンに手を伸ばそうしたとき、急に人気がなくなった。カップルや幼い子連れの親子で賑わっていた公園は閑古鳥が鳴くように静まり返っていた。

「はあ〜。私の至福の時間を台無しにしてくれるなんて」

エリスは仕方なく2個目に手を伸ばすのをやめた。エリスの背後にぞろぞろと魔導師が集結する。数はだいたい10人。しかし、その中でも一際高い魔力を持つ魔導師が居た。

「時空管理局執務官フェイトIIテストロッサIIハラオウンです。貴女にはロストロギア不法所持の疑い、及び公務執行妨害で逮捕状が出ています。」

抵抗しないなら、弁護の機会が貴女にはある。同意するなら武装の解除を」

「ふうん……」 “金色の閃光”を出してくるってことは管理局も本気ってことか。」

エリスは振り向かずにもうそう呟く。

刹那、エリスの漆黒の髪と漆黒の瞳が炎髪灼眼に代わり、すずかに貰った普通の衣服の上に黒いマントのようなモノを羽織る。

「さっきの答えだけど……返答はNOだ。

管理局に私の宝物を渡すわけにはいかない」

「なら、力づくでも」

「ふん。」

エリスはマントのようなモノの中にメロンパンが入った紙袋を収納し、代わりに無骨な大太刀“贄殿遮那”にえどのしやなを取り出した。

い（数は10人。その内の5人は結界班、つまり戦闘には参加できない）

エリスは贄殿遮那を自然体で構える。

一陣の風が舞い上がった刹那、金髪の魔導師フェイト「T」ハラオウンが真っ先に行動を開始した。

(とりあえず……デバイスをぶっ潰す!!)

贄殿遮那に紅蓮の炎を纏わせてエリスも突進する。

「はああああ!!」

金色の斧と紅蓮の大太刀が凌ぎを削る。

「接近戦で私に勝とうなんて……100年早い!!」

「あっ」

下から強い力で押されてフェイトは万歳するような形になる。
エリスは握り手をすぐさま持ち替えて贄殿遮那を無防備になった胴体……ではなく、黒いデバイスに向かって振り下ろす。

《Defencer》

デバイスは自分の危機を感じ取ったのかコアを守るように障壁を展開する。

「無駄あー!!」

急ごしらえの障壁ではエリスの攻撃を一秒たりとも防ぐことは出来ず、フェイトのデバイスは障壁ごとコアを真つ二つに切り裂いた。

「あ……………」

フェイトは茫然とコアを破壊された自分のデバイス眺める。

その致命的な隙にエリスはフェイトの無防備になった腹部に思いっきり鋭い蹴りを入れる。

「がはっ」

「でやああああ!!」

贄殿遮那に膨大な紅蓮の焰が渦巻き、そのままエリスは贄殿遮那を振るう。

大太刀に渦巻いていた紅蓮の焰は津波となって魔導師たちに襲い掛かった。

「うーん……………威力が低いかな？始祖はこの一撃で10人の

戦士を薙ぎ払ったって伝説が残ってるし」

エリスが一人思考の海に嵌っていると紅蓮の炎を突き抜けて無数の魔力弾が飛来した。

「無駄。その程度ではこの“夜笠”の防御は打ち破れない。」

黒いマントを翻すとそのマントが盾の役割を果たし、無数の魔力弾を防いだ。

エリスが羽織る黒いマントの名前は“夜笠”。サントメール家の炎髪灼眼の称号を襲名した者に贅殿遮那と一緒に渡される最高の防御力を誇る防具である。

また、銃器や刀などを収納しておける非常に便利な道具である。

「やっぱり威力不足か……………」

エリスは自分の未熟さを嘆いた。

その刹那、紅蓮の炎を超えて再び攻撃が飛来する。今度は魔力弾だけではなく、砲撃も混じっている。

エリスは背中に紅蓮の炎で編まれた双翼を展開すると色が抜け落ちた空に飛んだ。

それと同時に気配を隠す自在法を構築し、行使する。

(向こうは私が飛べないと思ってるみたいだね。)

空に上がったエリスからは相手の布陣がまるわかりだった。5人の魔導師が2列に並び、長篠の戦いのように交互に攻撃を失っている。どうやらデバイスを失ったフェイトがこの結界を維持しているようだ。

（このまま向こうが疲弊するのを待つか、こっちから仕掛けるか・・・）

いや、疲弊を待つのは“炎髪灼眼の討ち手”の称号が泣く。なら、私が選ぶべき選択肢は！！）

エリスの右腕に紅蓮の炎が集まり、巨大な蛇のような姿を形作る。それは初代“祭礼の蛇”が使用していた自在法と初代“炎髪灼眼の討ち手”が使用していた自在法を混合して作り上げた自在法だ。

「喰らい尽くせ！！」

紅蓮の蛇が攻撃を続ける魔導師の一人に向かって突進する。そして、大きな口を開けて・・・その魔導師を喰らった。

「ぎゃあああああああ！！！！！！」

蛇に丸呑みされた魔導師は断末魔の悲鳴をあげた。その断末魔の悲

鳴が止むとエリスのほうに力が流れ込んできた。

「私に襲い掛かってきたんだから……殺される覚悟はあるよね？」

エリスはニヤリと唇を三日月に歪めた。

そのエリスの邪悪な笑みを見た魔導師は震えだした。

「自在法、“ヤマタノオロチ”！！」

エリスの紅蓮の双翼が9本の首を持つ紅蓮のヤマタノオロチに変貌する。

そして、その九本の炎蛇が魔導師たちに一斉に突進していく。

くパキンッ！！く

炎蛇が魔導師たちを食いつくそうとしたとき、ガラスが割れるような音と共に結界に輝が入った。

(拙い！！！)

エリスは自在法を解除してすぐにその場から離れた。その数秒後、海鳴臨海公園を覆っていた結界が音を立てて崩壊した。

結界の崩壊によって退かざるを得なくなったエリスは海鳴臨海公園から少し離れた森の中で戦闘形態を解除した。

「まったく・・・管理局の癖に随分と無茶なことするな。戦闘中に結界を解除するとは思わなかったよ」

タイミング良く結界が崩れかけたのは偶然ではない。結界を維持していたフェイトが咄嗟の判断で結界の崩壊を起こし、相手に退かざるを得ない状況を作り上げたのだ。

「さて、そろそろすずかの屋敷に戻ろうと」

夜笠に収納したメロンパンを取り出して、エリスはすすかの屋敷に向かって足を進めた。

第17話 炎髪灼眼の討ち手（後書き）

おかしいな。ここまでシャナ要素を入れるつもりはなかったのに。

第18話 討伐隊襲来

第18話 「討伐隊襲来」

簡単なあらすじ

S級ロストロギア神剣 贄殿遮那を狙って一人つきりとなったエリスに奇襲を掛けた管理局。
しかし、管理局の数少ないSランク魔導師、“金色の閃光” フェイトⅡⅡハラウンを派遣したにも関わらずエリスに奇襲を仕掛けた部隊は無様に敗北した。
フェイトの機転で結界を破壊し、エリスを襲ってきた部隊は命からがらに逃げ帰った。

エリス襲撃よりもう2週間が経過した。

嵐の前の静けさか、その2週間の間は管理局もおとなしくしており、アリサたち三人は平和な日々を送っていた。その間もアリサたちは絆を深めあい、実力を着々と伸ばしていた。

アリサやすずかにとってエリスという同年代な上に実力が近い者が訓練に参加するようになったのが一番の刺激剤になったようだ。

「ギターたの奴、遅いわね……。自分で呼び出しておいで遅れてくるってどういっ了見よ？」

「まあまあ。ギターはきつとはやてちゃんをまくのに時間がかかってるんだよ」

日曜日。アリサとすずか、エリスは管理局にスパイとして潜り込んでいるギターに呼び出されて海鳴臨海公園まで訪れていた。

彼これ待ち合わせ時間から10分ほど経過しているが、ギターが現れる気配は一向にない。

「わりい。遅れた」

「もう!!遅いわよ、ヴィー……タ……」

「……」

ヴィータは10分も遅れたが、ちゃんと到着した。しかし、三人はヴィータの服装に啞然とした。

「あんま見んな……………」

ヴィータもさすがに恥ずかしいのか頬を少し紅く染めている。ヴィータの服装は血赤色と黒を基調にしたゴシック調のドレス。いつもおさげにしている髪も解かれており、鮮やかな赤色の大きなリボンでポニーテール状にされている。元々人形の容姿も相まって動かなければ、等身大の人形と間違えるほどだ。

「どっしたの？その服」

「いや、来るまでにはやてとシャマルに着せ替え人形にされてたんだ。」

「「あ……………」」

素のはやてを知っているアリサやすずかは心底ヴィータに同情した。

「それで。私たちに話したいことって何よ？」

「ああ。管理局が討伐隊を二日後に派遣するらしい。」

「……規模は？」

「武装隊が2個中隊。次元航行艦が5隻。今まで一番大がかりだな。まあ、正規管理局員の他にも傭兵も混じっているから指揮系統がガタガタだな」

「つまりは烏合の衆ってわけね。」

「でも、2個中隊はきつくありませんか？」

エリスは首をかしげてそう言った。

ドラグニティ討伐隊はこれまでも何度も派遣され、アリサとすずかの二人に撃退もしくは皆殺しにされているが、いずれも規模は大体一個中隊ぐらいだ。

つまり、単純計算で倍の数の魔導師が敵になるということだ。

「今回はエリスも居るから大丈夫でしょ。」

「……………まあ、ご期待に添えるように頑張ります。」

「例によつてあたしは手伝えねえからな？あたしも使い魔とか持つてたらいんだが……………」

「気にしないでいいわよ。ヴィータにはスパイっていう結構危険なことをしてもらってるんだから」

その後、ヴィータを交えて作戦を練り、時は過ぎて行った。

しかし、四人は気付かなかった。四人の会話をとある同年代の少女が聞き耳を立てて聞いていたことを。

「大体2年ほど経過しているけど……………まさかあの二人が、
ね」

アリサたち四人が待ち合わせしていた海鳴臨海公園から少し離れた場所。

そこにアリサたちの会話を聞いていた人物が静かに佇んでいた。日曜日で大勢の人とすれ違っているにも関わらず町の住人は少女に気づいた素振りすら見せない。

しかも、魔力の気配に敏感な四人すら気づけないほどの認識阻害を掛けて自分の存在を完全に隠蔽していた。

「二人も……こんな世界に入っちゃったんだね。」

二人というのは四人の内の誰を指しているのかわからないが、その少女は悲しそうに空を見上げながら一人呟いた。

「……止めよう。今更二人に平穩の与えられるわけがない。血に汚れた私が出るのは……二人は安全に暮らせる世界を、数多の種族が争わず共存できるような世界の理を築き上げることだけ。」

一陣の風が少女の素顔を隠していたフードを取る。

「そのために私は……反逆する」

・
・

・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

あっという間に二日という月日が経過した。

討伐隊がいつもやってくるのは、夜なのでアリサ・すずか・エリスの三人は夜の海上で敵の襲来を待っていた。アリサとすずかは正体が知られないように仮面を被り、武器も召喚して万全な臨戦態勢だ。エリスも《夜笠》を羽織り、右手には贄殿遮那が、左手には紅蓮の炎蛇が巻きついている。

「すずか、エリス。今日は壮絶な戦になるわ。相手が弱いからって気を抜かないようにね」

「うん。」
「わかった。」

「……………来た!!」

すずかの騎士甲冑のマントに隠れているベビー・ドラゴンがマントから顔だけを出して三人にそう告げた。

その刹那、夜の海上に広範囲の封鎖領域が展開され、曇天が覆い、月が見えなくなった空に複数の転移魔法陣が展開された。

そして、“次元の扉”が開かれて“次元の海”から五隻の次元航行艦が姿を現した。

転送魔法陣からも討伐隊の管理局員と傭兵たちがぞくぞくと現れる。

「行くわよ、タイラントドラゴン」

ギャオオーンッ!!

「私たちも行くよ、真紅眼の闇竜」

キユオオーンッ!!

「父さん、母さん。今こそ仇を討つために……………エリスは戦います!!」

三人はほぼ同時に管理局の軍勢に突進していった。

その三人を迎撃するために殺傷設定の砲撃が幾重にも放たれる。しかし、三人は気にせず突っ込んでいく。

「はっ！そんな砲撃じゃあ、タイラントドラゴンの対魔力は破れないわよー！」

砲撃は確かにタイラントドラゴンに命中している。しかし、ダメージがあるような様子は一切ない。

竜種は幻想種の中でも最強と言われ、その対魔力は抜き出ている。魔法で竜種を傷つけるのはほとんど不可能と言っても過言ではない。

「タイラントドラゴン、手前の敵を殲滅しなさいー！」

ゲガアアアアツッー！

タイラントドラゴンの口から炎のブレスが吐き出されて敵を焼き尽くす。

もつともバリアジャケット&障壁の影響でそれほどダメージを与えられないのは目に見えているが。

「紅魔剣 参の太刀……繚乱烈火！」

タイラントドラゴンから跳躍したアリサは《紅魔剣》に炎を纏わせ、舞を舞うように《紅魔剣》を振るう。ちなみに、アリサは飛行魔法を使えない。なら、どうやって宙に浮いているかという足元に見えない足場を形成する魔法を使っているのだ。

「撃つてえ!!」

仮の指導者の号令と共に一斉にアリサに向かって砲撃や魔力弾が襲いかかった。

「紅魔剣 五の型……紅蓮抱擁!!」

《紅魔剣》が纏う炎が一気に燃え上がり、アリサを膜のように包み込んで攻撃から守る。

普通の炎なら貫通されるが、《紅魔剣》の炎は魔力も焼き尽くす。ゆえに、敵の攻撃は意味を成さず、足場を形成していた魔法も解除され、アリサは宙に投げ出される。しかし、すぐさまタイラントドラゴンが回り込んでアリサを背中に乗せる。

「レッドアイズ、突っ込んで!!」

キュオオーンッ！！

レッドアイズは甲高い鳴き声を上げると敵の軍勢に一直線に突き進んでいった。

すずかは両手に2本の槍を握りしめる。右手の青い槍が明る過ぎる水色の魔力を纏う。さらに、レッドアイズの身体も同じ色の魔力光が包み込む。

「天魔破碎撃！！」

レッドアイズの背中から飛び上がったすずかは魔力が籠った青い槍を敵軍の中央に向けて投擲した。

すると、青い槍に籠められた魔力が強烈な暴風となって敵軍のバランスを突き崩す。

体勢を崩された敵軍にレッドアイズの突進攻撃が襲いかかる。

「奥義、桜花烈風」

いつの間にかすずかはレッドアイズの突進攻撃を避けた敵軍に身を紛れさせていた。

純白の長槍で遠心力を加えた回転攻撃を行くと桜吹雪のように魔力弾が舞った。

「二人とも凄いな。私も負けてられないね」

贄殿遮那を振るい、敵軍を撃退してるエリスはとても余裕だった。

「自在法、“騎士団”^{ナイツ}!!!」

エリスの背後に剣と盾を持った紅蓮の炎でできた軍勢が現界する。

「行け!!!」

エリスの号令と同時に小さな騎士団は敵軍に突進していく。
さらに、騎士団と共にエリスも戦場を駆ける。

「天翔紅蓮斬!!!」

贄殿遮那に紅蓮の炎が纏い、その刀身を伸ばす。

炎を纏った贄殿遮那を振るうと敵軍は次々に墜落していった。

•
•
•

•
•
•
•
•

.....

.....

数分後、二個中隊は居た敵軍はわずか10人足らずまで減った。もつとも全員が殺されたわけではなく、次元航行艦に回収されている者も居た。

「さあ、覚悟はいいかしら？」

「.....ふつ。残念だが、お前たちの負けだ。」

「こちらはたった今“アルカンシエル”のチャージが完了した。」

「「「!」」」

「どうする？お前たちなら、アルカンシエルを避けることはできるだろうが、後ろの街はどうだろうか？」

「くっ.....」

アリサは悔しさで唇を噛んだ。

無関係な人と街を人質にとられたアリサたち。

この絶体絶命な状況をどのように打開するのか？

第18話 討伐隊襲来（後書き）

さて………そろそろアイリンさんにも登場願いますか。

今回の話で出てきた少女の正体は………言わなくてもわかりますよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6295v/>

ガスタの里に舞い降りた白き魔導師～我が儘な正義を断罪する者～

2011年11月16日20時32分発行